

参加アーティスト

平成25年3月22日現在

<http://aichitriennale.jp/>

目次

現代美術	P01
パフォーミングアーツ	P21
プロデュースオペラ「蝶々夫人」	P25
映像プログラム	P27

現代美術



青木 淳 (あおき じゅん / AOKI Jun)

1956年神奈川県生まれ。東京を拠点に活動。磯崎新アトリ勤務を経て、1991年に独立し、事務所を設立。機能による部屋の分節を拒否しつつ、廊下のようにつながるワンルーム的な空間をもつ「H」(1994)などの住宅を発表し、新しい感覚による知的な空間の操作で脚光を浴びた。90年代後半からは公共施設を手がけ、2000年には青森県立美術館のコンペで1等を獲得。これは土を掘り込んだボリュームとその上にある凸凹の構築物のあいだに展示空間が生じ、また新築ながらあたかもすでにリノベーションされたかのようなデザインをもつ。奥行きがないことを逆手にとった設計による、「ルイ・ヴィトン名古屋」(1999)は日本初の独立路面店として成功し、その後、青木は銀座、六本木、ニューヨークでも設計を担当しただけではなく、世界各地のルイ・ヴィトンで名古屋のスタイルが採用されることになった。また東京国立近代美術館の「連続と侵犯」展(2002)では、アーティストのひとりとして参加し、リノベーション的な手法で美術館の表裏を反転させるような異空間「U bis」を出現させた。このインスタレーションは巡回先の国立国際美術館において、もう一度空間を反転させている。ほかにも、TARO NASU GALLERYのインテリアデザイン、青木野枝や杉戸洋らとのコラボレーションなど、美術と建築を架橋するプロジェクトを発表している。

《U bis》2002
東京国立近代美術館「連続と侵犯」展での展示風景
photo: 阿野太一



青木野枝 (あおきの え / AOKI Noe)

1958年東京都生まれ。東京を拠点に活動。1983年武蔵野美術大学大学院造形研究科(彫刻コース)修了。2000年芸術選奨文部大臣新人賞受賞。2003年中原悌二郎優秀賞受賞。2000年に目黒区美術館で「青木野枝展一軽やかな、鉄の森」を開催。青木は80年代初頭より鉄を素材に制作と発表を続ける。鉄板から溶断して切り出し、それを溶接して、つないで制作する。「鉄」の持つ重々しいイメージと塊としての「彫刻」のイメージを見事なまでに払拭した、シンプルで見ると大きく開かれた作品が特徴。美術館の展示室内に限らず、屋外においても、作品を設置することで大気と時間を包みこんだ場所へと変化させるアーティスト。

《空の水-II》2005
アートプログラム青梅 SAKURA FACTORY (青梅市)での展示風景
photo: 山本糾
courtesy of Gallery Hashimoto, Tokyo



青野文昭 (あおの ふみあき / AONO Fumiaki)

1968年宮城県生まれ。仙台を拠点に活動。リアス・アーク美術館や宮城県美術館などで作品を発表してきた。1990年代から海岸の漂流物など、さまざまな場所で壊れたモノの欠片を拾い、「なおす」と称し、それを補完する制作手法を継続している。だが、青野は再び使えるモノとして正確に復元するわけではなく、「修復」を通じてむしろ使えない異物に変容させてしまう。近年は異種混成的な補完も展開している。自身も少なからず被害を受けた東日本大震災の後は、自宅近辺や親戚宅、馴染みの場所をはじめとする被災物件からた瓦礫を用い、様々なアプローチでその「補完」を試みることにより、あるべき再生の姿を探求している。しかし、別の用途に役立つリサイクルでもなく、機能しない何かを「創造」する姿勢は変わらない。震災という歴史的な事象は彼の作品の意味を変えた。震災前から震災後の制作を変わらず行っていることも特筆すべきである。

《なおす・代用・合体・侵入・連置—震災後の石巻で収拾した廃船の復元》2012
courtesy of the artist



荒井理行 (あらい まさゆき / ARAI Masayuki)

1984年ウィスコンシン州生まれ。大阪を拠点に活動。2011年愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻修了。インターネット上の画像や雑誌から切り出してきた写真をコラージュし、現実の世界を写した写真の周囲に絵を描き足して写された場面を拡張することで、現実には有り得ないイメージを再構成する。コラージュされる写真は報道写真から映画の一場面まで様々なものであり、東日本大震災の被災地の写真が利用されていることもある。再構成されたイメージは、現実の社会に対して何らかの解釈を施している場合もあれば、シニカルな視線を投げかけている場合もある。そしてそのイメージによって常に示唆されているのは、現実の出来事が異様な力によって歪められる可能性が存在していることである。

《Who am I》2013



ブラスト・セオリー (Blast Theory)

1991年設立。ブライトン(イギリス)を拠点に活動。演劇、美術、ストリートカルチャーなどの異分野を横断しながら、現実と仮想現実の間に生じる相互的な関係を探索する作品を発表している。ビデオやコンピュータゲーム、携帯電話など現代社会に欠かせない技術を積極的に用いて、戦争やテロ、あるいは見知らぬ者同士が集まる都市を主題としてとりあげてきた。いっぽう鑑賞者や参加者は、ゲームに参加したり、都市を移動しながらも、巧みな物語の構成によって個人の内面へと降りていくような体験をする。大学をはじめ、研究機関や文化機関との共同制作も多い。英国で優れた映像作品に授与されるBAFTAのインタラクティブ部門に4回ノミネートされ、2003年アルスエレクトロニカでは金賞を受賞。2009年の第53回ヴェネツィア・ビエンナーレには、アイルランド共和軍(IRA)とドイツ赤軍のテロリストを題材にした《ウルリーケ・アンド・イーモン・コンプライアント》を出展した。

《Ulrike and Eamon Compliant》2009
Installation view at 53rd Venice Biennale, Venice, Italy

ジャネット・カーディフ&ジョージ・ビュレス・ミラー (Janet CARDIFF and George BURES MILLER)

カーディフは1957年オンタリオ州ブリュッセルズ(カナダ)生まれ。ビュレス・ミラーは1960年アルバータ州ベールビル(カナダ)生まれ。共にブリティッシュ・コロンビア州グランドロッド(カナダ)を拠点に活動。1995年から共同制作を開始。主に音を使ったマルチメディア・インスタレーションで世界的に知られている。代表作にはオーディオガイドやビデオカメラを使用して、会場を巡りながら、音声や映像で語られる物語を追う「ウォーク」シリーズや、トマス・タリス『我、汝の他に望みなし』を歌う聖歌隊40人の声をそれぞれ録音し、40個スピーカーで空間に再構成した《40声のモテット》などがある。彼らの作品は観客が実体験として感じられるような没入型の作品である。2001年には第49回ヴェネツィア・ビエンナーレのカナダ館の代表として参加し、特別賞とベネッセ賞を受賞。ドクメンタ13(2012)など国際展にも多数参加している。



ステファン・クチュリエ (Stéphane COUTURIER)

1957年パリ生まれ。パリを拠点に活動。2003年にマルセル・デュシャン賞にノミネートされる。また、同年にはニエプス賞を受賞。フランスを代表する写真家の1人である。彼は自動車工場の内部や宅地開発の現場、大都市の建築物などを撮影した写真で特に知られている。これらの風景には世界規模で進む社会の変化の様相が刻まれており、私たちが生きる世界の流動性がダイナミックに表されている。そのため彼の作品は、建築や美術といった文脈のみならずドキュメンタリーや社会学といった視点から見ても興味深いものとなっている。中でも「メルティング・ポイント」シリーズは、複数の視覚的要素を重層的に掛け合わせることで制作されており、まさにハイブリッドな現代社会を反映したシリーズである。人工的ながら奇妙な現実感をも備えたそれらのイメージは、見る者の視線を捉えつつもはぐらかし、多様な要素が絶えず結合と切断を繰り返す現代社会の複雑な現状を指し示すかのようである。

《Melting Point, Havana no.2》2006-2007
courtesy of the artist



ミッチ・エプスタイン (Mitch EPSTEIN)

1952年マサチューセッツ州生まれ。ニューヨークを拠点に活動。彼の写真はニューヨーク近代美術館をはじめとする欧米の美術館に収蔵されており、ボン市立美術館など欧米の公的美術館で、大規模な個展も開催されている。1970年代後半にインド、1990年代にはベトナムを撮影するなど評価を得た後、アメリカの風景に取り組む。代表作「アメリカン・パワー」(2003-2009)は、アメリカの原子力も含む幾つかの発電所とコミュニティ、そして消費の風景を重ね合わせて、ダイナミックに文明論を思わせる規模で緻密に撮影したシリーズで、彼の評価を不動のものとした。

《BP Carson Refinery, California》2007
courtesy of Sikkema Jenkins & Co., New York and Galerie Thomas Zander, Köln



ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ (Nina FISCHER and Maroan EL SANI)

1965年エムデン(ドイツ)に生まれビジュアル・コミュニケーションを学んだニナ・フィッシャーと、1966年デュイスブルク(ドイツ)に生まれ映画学を修めたマロアン・エル・サニによるユニット。1993年よりベルリンを拠点にコラボレーションを開始。社会や政治体制の変化の結果、本来の目的を失った建築物や場の歴史、記憶、痕跡、そして複雑に絡み合う人々の思いに注目し、ドキュメンタリー、フィルム、写真、漫画など様々な方法論とメディアを横断した映像作品を制作してきた。光州ビエンナーレ(1995、2002、2008)、マニフェスタ4(2002)、イスタンブール・ビエンナーレ(2007)など世界各地の国際展やレジデンスで活躍する一方、1996年以来日本でも数多くの展覧会に参加。2007年~2010年には札幌市立大学准教授として札幌を拠点に活動した。日本で制作された代表作には、軍艦島での撮影取材を基に制作され世界各地で高い評価を受けている映像インスタレーション《Spelling Dystopia/サヨナラハシマ》(2008-2009)、成田空港周辺農地の歴史を紐解いた《ナリタ・フィールド・トリップ》(2010)など。東日本大震災後も日本の状況を常時気にかけてながら震災前後の人々の日常の変化をテーマにした制作を継続しており、その第一作である《Spirits closing their eyes》(2012)はメディアシティ・ソウル2012に出品された。

《Spirits closing their eyes》2012
Installation view at Media City Seoul Biennale 2012
courtesy of the artists and Galerie Eigen + Art, Berlin



藤森照信(ふじもり てるのぶ / FUJIMORI Terunobu)

1946年長野県生まれ。東京を拠点に活動。建築史家として1974年に建築探偵団を結成し、日本の近代建築研究をさわめる一方、1986年に赤瀬川原平らと路上観察学会を立ちあげ、都市の中に意味のずれたオブジェなどを発見するフィールドワークを行う。その後、異形の造形をもつ「神長官守矢史料館」(1991)によって建築家としてデビューし、自邸の「タンポポハウス」(1995)や「高過庵」(2004)など、ユニークな住宅や茶室を手がけ、また施工のために縄文建築団も結成した。土着性を感じさせながら、実際はどこにもない、あるいは見たことがないのに、懐かしさを感じさせる作風は、「インターナショナル・ヴァナキュラー」と呼ばれる。第10回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2006)において、藤森は日本館で自作を紹介し、卓越した功績をあげた展示として公式に高く評価されたのを契機に海外での仕事が増え、イギリス、オーストラリア、台湾などでも作品を発表している。2010年は茅野市で宙に浮かぶ「空飛ぶ泥舟」、2012年はミュンヘンで「ウォーキング・カフェ」を制作し、ユーモラスな茶室が話題を呼んでいる。

「空飛ぶ泥舟」2010
courtesy of the artist



藤村龍至(ふじむら りゅうじ / FUJIMURA Ryuji)

1976年東京都生まれ。東京を拠点に活動。東京工業大学で学び、2005年より藤村龍至建築設計事務所を主宰。独自のデザイン手法である超線形設計プロセス論を用いた作品、「BUILDING K」(2008)で注目を集めた。一方でフリーペーパーやウェブマガジンの企画制作、あるいはtwitterなどのメディアを通じた情報発信、また、2012年青森県立美術館「超群島 ーライト・オブ・サイレンス」展などのキュレーションも精力的に行う。東日本大震災後は批評誌の『思想地図β』において、福島県双葉町の住民の集団移転を想定したリトルフクシマの都市計画のほか、国土インフラの脆弱性を改善すべくリスクヘッジを考慮した第二の国土軸、また、ステーションシティを核とした都市の再編成を行う「列島改造論2.0」を発表した。最近では思想家の東浩紀が提唱する「福島第一原発観光地化計画」にも関わり、国土スケールから新しい日本の姿をデザインしようとする野心的な若手建築家である。

「列島改造論2.0」2012
photo: 新津保建秀



マーロン・グリフィス (Marlon GRIFFITH)

1976年ポート・オブ・スペイン(トリニダード・トバゴ)生まれ。名古屋を拠点に活動。マスと呼ばれるトリニダードのカーニバルのコスチューム・デザイナーとして活動後、観客も参加できるパレードの作品を制作している。2004年のBag Factory Artists' Studios(ヨハネスブルグ/南アフリカ)でのレジデンスでは、伝統的なマスと仮面制作のワークショップを行い、他のアーティストや地元住民とカーニバルを行った。2008年には光州ビエンナーレのパブリックパフォーマンスイベント「SPRING」で、光州事件とトリニダードのカーニバルの起源を題材にした《Runaway Reaction》を発表。パレードのようなパフォーマンスの他に、彫刻作品やインスタレーションも発表している。代表作には女性の首と胸にペビーパウダーでファッション・ブランドのロゴを転写する写真シリーズ《Powder Box》がある。2009年のCAPE09(ケープタウン/南アフリカ)や2012年、マニフェスタ9の関連イベント「コスモポリタン・ストレンジャー」(ベルギー)などの展覧会に参加。

《Runaway Reaction》2008
Gwanju Biennale, Gwanju, South Korea
photo: 太田朗子



ゲッラ・デ・ラ・パス (Guerra de la Paz)

アライン・ゲッラ (1968年キューバ・ハバナ生まれ) とネラルド・デ・ラ・パス (1955年キューバ・マンタンサス生まれ) の2人によるユニット。1996年から一緒に制作活動を行う。ともにアメリカで美術を学び、現在はフロリダ州マイアミを拠点に活動。彼らが拠点とするマイアミのリトル・ハイチは、「ペペ」と呼ばれるハイチ向けに輸出される中古品ビジネス地の近くにある。その取引によって生み出される大量のゴミ処理場行き衣類を2人は主な素材としてきた。工夫して物を再利用することは美術と同じくらいに歴史がある。「衣服が人を作る」ということわざがあるように、中でも使われなくなった衣類は人間のエネルギーとメタファーに満ち、消費や環境問題、個と集団、企業倫理、社会的権力といった世界共通の問題を自ずと浮かび上がらせる。彼らは自らの実践を、思慮深く過激な「考古学」であると見なしている。彼らの体感型のインスタレーションは、才気にあふれ、演劇的で、しかも明快である。しかしその作品の意味は澄んではない。というのも、現代生活の矛盾を彼らが体現していること自体を、作品が包み込んでいるからである。

《Follow the Leader》2011
courtesy of the artists



ハン・フェン (HAN Feng)

1972年ハルビン (中国) 生まれ。上海を拠点に活動。ハルビン師範大学芸術課程で学んだ後、上海大学芸術課程の修士に進む。2008年にクリエイティブ・ニュー・アーティスト・コンペティションで審査委員賞、2010年、中国のジョン・ムーア現代絵画賞で最優秀賞、また、M50アート・ギャラリー賞を受賞。上海では、2009年ドン・ギャラリー、2010年上海現代美術館 (MOCA) の「フライング・サークルズ」展、2011年アラウンドスペースにて個展を開催。また、2012年にはイギリスのマンチェスターにある中国アート・センターにて個展を開催。

また、2008年上海のZhu Qizhan Art Museum、ミラノ現代美術館、2010年上海現代美術館「+follow」展、2011年アルゼンチンで開催されたウシュアエア・ビエンナーレ、2012年に、コロンビアのボゴタ近代美術館やキューバのウィフレッド・ラム・コンテンポラリー・アート・センターなどのグループ展に参加。彼がキャンバスに油彩で描く時にも、紙を折り畳んで作る彫刻によるインスタレーション作品を手がける時にも共通して見られるのは、その繊細な感性である。これは、新しい方法や材料に応用しながらも、伝統的な水墨画を学んだことに由来する。彼は、現代生活における状況を身体的かつ感情的に深く感じ取ることのできるアーティストである。

《The Waves1》2010
courtesy of the artist



彦坂尚嘉 (ひこさか なおよし / HIKOSAKA Naoyoshi)

1946年東京都生まれ。神奈川県を拠点に活動。多摩美術大学のバリケードの中で展覧会を開いた美共闘のアーティスト。このときの作品から展開し、1970年、自宅の八畳間にラテックスを大量に流すフロアイベントを行ったり、ウッドペインティングのシリーズを制作している。また、ラカンの精神分析を背景にした芸術分析の理論を構築し、ブログを通じて発表するほか、歴史への深い関心から連続シンポジウムのアートスタディーズを企画した。2009年より立教大学大学院の特任教授に就任。近年は「空想皇居美術館」(2010) など、建築界との交流を通じたプロジェクトも手がける。東日本大震災の後、京都に疎開したが、福島県南相馬の仮設住宅地の塔のある集会場では、外壁に「復活」という絵文字のグラフィティを描く。設計段階からアートが組み込まれた仮設住宅地は、ここだけである。そして彦坂は被災者の和歌を集めた『3.11万葉集・復活の塔』(2012)を刊行した。

彦坂尚嘉+気体分子ギャラリー: 福島県南相馬グラフィティ《FUKUSHIMA 復活》2011
(建築設計: 東北大学都市建築理論研究室+芳賀沼整・はりゅうウッズスタジオ)
photo: 彦坂尚嘉+senkichi



平川祐樹 (ひらかわ ゆうき / HIRAKAWA Youki)

1983年愛知県生まれ。ドイツを拠点に活動。2008年名古屋学芸大学大学院メディア造形学科研究科修士課程修了。映像を中心として、写真やインスタレーション、あるいはそれら複数のメディアを組み合わせた作品を発表している。それらの作品の中で扱われているのは、非個人的な都市における断片化し宙吊りになった現代の物語や、場所に深く根付く固有の存在といったテーマである。また燃えている蠟燭や凍った葉などを撮影したシンプルな作品においては、経過した時間の痕跡をとどめている。そうした多面的な彼の作品に共通しているのは、静的で硬質なイメージの強度である。あいちトリエンナーレ2010では企画コンペ部門で出品し名古屋市内を流れる中川運河を撮影した映像作品を発表した。

《Vanished Tree》2012



平田五郎 (ひらた ごろう / HIRATA Goro)

1965年東京都生まれ。茨城県を拠点に活動。1990年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程壁画研究室修了。パラフィンワックス(蠟)によって制作される建築的な構造物で知られる。シンプルでユニタリーな立方体や球体から成るその構造物は、ミニマルな形態の彫刻としてというよりも、その中に入って体験する空間として提示される。その空間の内部は外から透過して入り込んだ光に満たされており、鑑賞者が観想し回帰していくことのできる原型としての「家」のようなものとなっている。また、北海道では凍結した湖面上に雪や氷でできた家を作ったり、アラスカ湾東岸部では石を積み上げた10個の彫刻を制作したりするなどパーソナルな仕事としてフィールドワークを続けている。

《窓辺の部屋》1999-2000
マツレスファクトリー(ピッツバーグ)での展示風景



トーマス・ヒルシュホルン (Thomas HIRSCHHORN)

1957年ベルン(スイス)生まれ。パリを拠点に活動。ヒルシュホルンの芸術への関わりは、人間性に対する彼の取り組みの一部とみなすことができる。なかでも社会的正義、思考すること、美しさ、複雑さ、そして責任などへの関与である。彼は、大量生産またはリサイクルされた日常の雑多な素材を用いて、ありふれた生活経験にも通じる手法で作品を生み出す。しばしばその作品は、素材を執拗に集積することで成立する。特筆すべきは、その生理的感覚に訴える質、激しい感情表現、さまざまな考え方への言及だろう。どこまでも生い茂り過剰なまでの細部をもつインスタレーションであるにもかかわらず、その思想は的確、エネルギーは一点に集中している。アーティストによって注意深く選ばれた形と素材は、イメージや思想、言葉をも含み作品へと織り込まれる。彼の作品は、現代社会の要望に心から応えようとするものである。2000年マルセル・デュシャン賞、2011年クルト・シュヴィッターズ賞など重要な芸術賞を多数受賞。

《Quiet Room with Tears》1996
courtesy of Galerie Susanna Kulli, CH-Zurich/Switzerland



池田剛介 (いけだ こうすけ / IKEDA Kosuke)

1980年福岡県生まれ。東京を拠点に活動。2003年京都造形芸術大学卒業、2005年東京藝術大学大学院修士課程修了。池田剛介は生態系や水といった自然界の循環や、電気や光などのエネルギーの変換を作品で扱う。2011年からアート・プロジェクト「東京藝術発電所」に着手し、これまで東京、大船渡、メルボルン、南相馬各地で関連するプロジェクトを発展させてきた。本作は自転車や日用品を用いて発電ができる簡易なデバイスを作り、それによって自らの運動・エネルギーを電気に変換する。一義的には発電プロジェクトだが、東日本大震災の被災地、エネルギー問題で揺れる都市、環境問題に対する意識の高い地域に池田が足を運び、地域の人々と共に行うことから、不可避免的に今日のエネルギー問題や、個人とコミュニティとの関わりが問われる。

池田の実践は、自明の理やテクノロジーや、同質的と思われるコミュニティの概念を再検証し、現代人の営みに必要な思考とエネルギーを自力で創り出すことである。コミュニティのなかの個人、水中の水滴といった個の単位を基点としながら、池田は人、エネルギー、自然がもつ大きな連鎖とサイクルを視覚化させる。

《Excycle》2012
Installation view at RMIT Project Space, Melbourne
photo: Andrew Barcham



インヴィジブル・プレイグラウンド (Invisible Playground)

2009年に、アーティスト、ゲーム・デザイナー、ミュージシャンや舞台制作者とともに、「都市そのものをゲームの舞台としよう」と結成されたグループ。ベルリンを拠点に活動。メンバーは、コアメンバーの7名を中心に、プロジェクトごとに変動する。都市空間を舞台に、参加者を募り、人や環境、メディアを含むテクノロジーによるつながりを用いたゲームを通して、都市や社会に対する認識を新たにするをテーマとする。ゲームの中で、見知らぬ者同士が、インヴィジブル・プレイグラウンドによって設定された「ルール」に沿って、協力し合い、または競い合うことで、日常行為の中では見えないことのない、都市と自分(人)との新しい関係性を発見することになる。欧米各地の劇場やアートスペース、フェスティバルに招聘されている。

《Lies in the Sand》2012



伊坂義夫、大坪美穂、岡本信治郎、小堀令子、清水洋子、白井美穂、松本旻、山口啓介、王舒野、PYTHAGORAS³ (覆面作家)

(ISAKA Yoshio, OTSUBO Miho, OKAMOTO Shinjiro, KOBORI Reiko, SHIMIZU Yoko, SHIRAI Mio, MATSUMOTO Akira, YAMAGUCHI Keisuke, WANG Shuye, PYTHAGORAS³)

今回出品される《「地球・爆—Earth Attack」第1番》は15枚組(2.27m×27.27m)で構成。錯で始まるこの合作「地球・爆」は、2003年に10人の画家と10人の評論家加わって構想され、最終的には11番(壁画が1番から10番、床置き作品が11番)で構成される巨大なプロジェクト。2001年に起こったニューヨークでの9.11の事件が制作のきっかけとなって、岡本信治郎が企画提案をし、複数のメンバーが賛同して参加している。互いに議論を交わしながら、不協和音や矛盾をはらみつつ、共同制作として作りあげること特徴としている。2003年に下絵の制作に全員で着手し、全作品の決定稿がそろったのが、2007年9月。それから本絵にとりかかり、まずは第1番が2013年2月に完成された。反戦絵画ではあるが、モノクロームで描かれ、書物のように読み解いていく絵画となっている。

《「地球・爆—Earth Attack」第1番》(部分)2013



石上純也 (いしがみ じゅんや / ISHIGAMI Junya)

1974年神奈川県生まれ。東京を拠点に活動。2000年東京藝術大学大学院美術研究科建築科修士課程修了。妹島和世建築設計事務所勤務を経て、2004年石上純也建築設計事務所設立。2007年の東京都現代美術館での「SPACE FOR YOUR FUTURE」展で、金属でできた重さ1トンのポリウムが宙にたどよう《四角いふうせん》を展示し注目を集める。2008年第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて個展。2009年「神奈川工科大学KAIT工房」で日本建築学会賞作品賞受賞。2010年第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展で金獅子賞を受賞。2010年資生堂ギャラリーおよび豊田市美術館で個展を開催。大胆なアイデアに基づく空間と構造物を作り建築の可能性を拓ける、今、国内外で最も期待され、注目されている建築家である。

《四角いふうせん》2007

東京都現代美術館「SPACE FOR YOUR FUTURE」展での展示風景

photo: 市川靖史

courtesy of Gallery Koyanagi



アルフレッド・ジャー (Alfredo JAAR)

1956年チリ生まれ。ニューヨークを拠点に活動。写真、映像、建築などを通して、社会的な不平等問題に目を向けさせるような作品を制作してきた。なかでも、1990年代の《ルワンダ・プロジェクト》は代表的なもので、1994年のルワンダで起きた集団虐殺のあった現場へ自ら行き、悲劇の実態取材したうえで制作された。このように、ジャーの作品制作は具体的な出来事や状況や背景を徹底的に分析することからはじまる。そのうえで、イメージと空間の背後にある社会的な関係性について問いを投げかける。イメージに内在する言語システム、それらを読むという作業、そして最終的にはそれらの脱構築(ジャーのいう「イメージの政治性」)を、作品を通して顕在化させる。

《Geometry of Conscience》2010

courtesy of the artist



ミハイル・カリキス&ウリエル・オルロー (Mikhail KARIKIS and Uriel ORLOW)

カリキスは1975年テッサロニキ(ギリシア)生まれ。ロンドンを拠点に活動。建築を学んだ後、音、映像、写真、パフォーマンスなどを使う横断的な表現を展開している。彼は人間の声について研究しつつ、コミュニティ、職業的なアイデンティティ、人権などのテーマを探求する作品を発表している。代表的なプロジェクト《Sounds from Beneath》は、イギリスの政策によって閉鎖された炭坑跡地にて、かつてそこで働いた高齢になった男達が当時聴いていた音(爆発、警報、蒸気、機械の音など)を思い出しながら歌う映像作品である。つまり、人の声が失われた日常的な労働の風景を甦らせるものだ。オルローは、1973年チューリッヒ(スイス)生まれ。ロンドンを拠点にマルチメディアのインスタレーションやサウンドの研究を行い、《Sounds from Beneath》の制作にあたり、記憶と歴史の場所としてのランドスケープに興味を持ち、カリキスと協働した。

《Sounds from Beneath》2010-2011

courtesy of the artists



片山真理 (かたやま まり / KATAYAMA Mari)

1987年埼玉県生まれ。群馬県で育つ。東京を拠点に活動。片山は、脛骨欠損という、主幹を成す太い骨がない病気を先天的に持って生まれ、9歳の時に両足とも切断している。そうした身体の特徴と、自分自身を取り巻く世界とのかかわりを、10代の頃より、オブジェや写真で表現してきた。それは、少女の頃の義足や小さなハイヒールを身に着けた、私的で内面的な親密さに満ちたセルフポートレート写真であり、実際に彼女が生活し、制作活動もする部屋の姿を、日用品と彼女が作ったオブジェで構成して提示することである。あるいは、彼女自身の手によって丁寧に装飾された両足の義足を提示することや、義足用に特注したハイヒールを着けた彼女自身のパフォーマンスの試みである。「アートアワード〜キョー丸の内2012」のグランプリを受賞。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。

〈ハイヒール〉2011



國府理 (こくふ おさむ / KOKUFU Osamu)

1970年京都府生まれ。京都を拠点に活動。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。國府理の作品の最大の魅力は、少年時代に夢みた不思議な発明や心躍る冒険をそのまま形にしてしまうところである。船の帆がついた自動車。パラボラアンテナの中にある小さな移動式の庭。クジラ型ロボットの骨格標本。國府は、これらSF小説に出てきそうな魅力的なメカを、自ら機械を加工して作り出す。けれども彼の作品は、科学技術がもたらす輝かしい未来ばかりを唱えているわけではない。科学技術が時に、大きな破壊と絶望をもたらさうことは、誰もが認めるところだろう。ひっくり返った乗用車の内部に美しい湿原を出現させた《虹の高地》(2008)は、人類なき後のユートピア的な世界を想像させる。さらに、水槽にガソリンエンジンを沈めた《水中エンジン》(2012)は、機械エネルギーの矛盾や暴力性をより直接的に痛感させる。エンジンは排気ガスを辺りにまき散らしつつ機動するが、その動力はどこへも行き着くことはない。核分裂を水で制御する原子炉をも彷彿させる作品である。

〈Parabolic Garden〉2010
photo: 豊永政史



レッド・ペンシル・スタジオ (LEAD PENCIL STUDIO)

1997年結成。アメリカを拠点に活動。アートと建築の境界線上で活動するユニット。空間の知覚を様々な角度から丹念にリサーチし、その対象だけを取り出すことで見慣れたものが見慣れないものに変化するような作品を発表している。その結果、彼らが「裏返しの建築architecture in reverse」と呼ぶように、建築的な機能を一切持たない形だけが顕在化される。そのため、建築物は純粹に形だけの存在に還元され、人間の知覚との関係性を取り戻すのである。そうした効果は、鉄の棒やテキスタイルのような抽象的な形をつくりやすい素材を組み合わせることによって生み出されていることが多い。《非-記号II》はアメリカとカナダの国境線沿いに現れる巨大なビルボードで、黒い鉄の線がその周辺を覆うように囲い、広告が表示されるはずの中心部は空虚になっている作品である。アメリカにおける建築のローマ賞を2008年に受賞するほか、様々な展覧会への参加や大学での講義など活動の幅を広げている。

〈Accumulation〉2008
Installation view at Wright Gallery, Seattle, WA
courtesy of the artists

イ・ブル (LEE Bul)

1964年韓国生まれ。ソウルを拠点に活動。ニューヨーク近代美術館、カルティエ現代美術財団、森美術館などで個展を開催している。奇怪な生物の手足を持つソフトスカルプチャーを着たパフォーマンスや、生魚の腐敗臭を漂わせる過激な展示で注目を集め、軍事政権から民主化へと急激な変化を遂げた韓国社会における抑圧と権力、あるいは人々の欲望をもとにした作品を発表してきた。また、機械と人間が融合したようなサイボーグ、あるいは触覚などが異常に発達したモンスターなどの彫刻によって身体的な造型において異彩を放つアーティストでもある。近年はブルーノ・タウトやウラジミール・タトリンらが参照され、光り輝きながらも崩壊していきそうな都市の模型の作品を数多く制作している。政治や資本が作り出す現実と理想の間で揺れ動き、誰もが自身の実像を捉えることが難しい現代社会。彼女の作品は、なかなか到達できない理想を追い求める私たちを鏡のように映し出しているようにみえる。



ニッキ・ルナ (Nikki LUNA)

1977年フィリピン生まれ。マニラを拠点に活動。フィリピン国内外で活動するアーティストであると同時に社会運動家でもあるルナは、2008年に非営利団体startARTプロジェクトを立ち上げ、性的虐待や紛争等で傷ついた女性や子ども達に対しアートを通じた支援を行っている。彼女の作品は、慣習に縛られ弱い立場に置かれた女性やレイシタ農園で起きたストライキの虐殺事件など、何らかの社会状況をもとに生み出されている。しかし、その表現は決して、声高で説教くさいものではない。卵やプレゼントボックス、宝石等のイメージがたくみに用いられているため、鑑賞者は繊細で詩的な印象すら覚えるだろう。このようにして彼女は社会とアートをごく自然に繋ぎ合わせてみせる。そして私たちの感性を刺激しつつ、抑圧に苦しむ人々について問題提起を行っている。

《Ovoid/Void》2010
courtesy of the artist



バシアー・マクール (Bashir MAKHOUL)

1963年ガリラヤ生まれのパレスチナ人アーティスト。イギリスに活動拠点を移してから20年以上になる。彼はさまざまな素材でモダニズムとポストモダニズム美学を探索してきた。同時に、これらは、彼の出自であるパレスチナ人であること、あるいはパレスチナ人になることの、陰影を持つ政治的な批評を孕んだものとなっている。写真やビデオの技術を応用した初期の豪華な絵画から、近年の拡大レンズを用いての写真作品にいたるまで、マクールは形式と内容、アートと政治の間の相互関係を探索してきた。彼の作品は美的な誘惑を特徴とするモチーフの繰り返しを用いることが多く、鑑賞者は作品の中に引き込まれていくと同時に、その美しいパターン性を超えた、複雑な何かと関わりあっていると気づく。作品の中には、実は、経済と国家、戦争と虐待が巧みに織り込まれている。《Enter Ghost, Exit Ghost》という今回のインスタレーションは、巨大な迷路であると同時に、アラブ世界の街あるいは難民キャンプの建築モデルでもある。マクールの作品は、英国のみならず国際的にも紹介されている。

《Enter Ghost, Exit Ghost》2012
courtesy of the artist



アンジェリカ・メシティ (Angelica MESITI)

1976年シドニー（オーストラリア）生まれ。シドニーを拠点に活動。ニュー・サウス・ウェールズ大学で美術を学んだメシティは、ビデオ、パフォーマンス、インスタレーションなどの手法にサイト・スペシフィックな行為や、現実の出来事のフィクション化あるいは記録といったアプローチを交えた作品を作りだす。2010年パリのボンビドー・センターやロンドンのテート・モダン展で紹介された後、2012年メルボルンの現代美術センターACCAの新進作家紹介展「NEW12」で《Citizens Band》(2012)を発表。現在オーストラリアで最も注目を集める若手アーティストの一人として活躍している。高い評価を受けた本作は、空間に正方形に配された4つの画面それぞれに、移民のパフォーマーが自らが暮らす都市の一角で音楽を奏でる様子が鮮やかに映し出される。カメルーン出身のパークッションニストは、パリの室内プールで水面を舞台に手で見事なドラミングをみせる。アルジェリアからパリに移民してきたストリート・シンガーは、メロで壊れかけたカシオのキーボードを肩にのせ哀歌を歌う。モンゴルがルーツのホームイ歌手はシドニーの街角で胡弓を奏でながら独特の声を響かせ、スーダン出身でプリズンに暮らすタクシー運転手は、運転席で哀愁漂う口笛で曲を奏でる。音楽と共に生きる喜びと移民として暮らす複雑な現実の気配を漂わせながら、4名の圧倒的なパフォーマンスは、文化間の移動によって失われゆく旋律と歴史という悲しい現実を示唆しつつ、観る者を魅了する。

《Citizens Band》2012
courtesy of the artist and Anna Schwartz Gallery



アーノウト・ミック (Aernout MIK)

1962年オランダ生まれ。アムステルダムを拠点に活動。ある同じ動作や出来事が繰り返され、まっすぐ進む時間の流れから宙吊りになったような映像作品をつくる。画面の中には矛盾する出来事が同時に起きていたり、物語が動き出しそうなのに留まり続けるような群衆の画像が映し出されることが多い。言葉の力を借りなくても観客が眼にする画像が、同時代の戦争やグローバリゼーション、市場、民族主義などといった政治や社会の問題と結びついていると感じさせるのもミックの作品の特徴である。多くの場合は無音で、まるで空間に丁寧に配置された彫刻のように複数のスクリーンを配置させる。そのことによって、鑑賞者に画面と自分の身体の関係性を強く意識するように仕向けるため、映像、パフォーマンス、彫刻、建築を横断するような試みとも考えられる。

《Refraction》2004
Installation view at Museum Folkwang, Essen, Germany, 2012
photo: Bernd Borchardt
courtesy of carlier | gebauer



宮本佳明 (みやもと かつひろ / MIYAMOTO Katsuhiko)

1961年兵庫県生まれ。兵庫県を拠点に活動。阪神淡路大震災の後、全壊判定を受けた実家を改造・補強を行い、「ゼンカイハウス」として甦らせたことで注目される。磯崎新、宮本隆司らと参加した1996年の第6回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展の日本館では、被災地の瓦礫を持ち込み、「亀裂」をテーマにした展示によって金獅子賞を受賞した。著作『環境ノイズを読み、風景をつくる。』では、建築を単体としてとらえず、地形、歴史的な要素、インフラなどを含む総合的な環境から捉える視点を示している。こうしたモノの見方は本格的な山登りの経験からも培われたものだ。澄心寺の庫裏コンペでは、空間の使い方が変わっても、コンクリートの大屋根が100年残ることをコンセプトに掲げ、設計者に選ばれ、プロジェクトを実現させた。東日本大震災の直後、いち早く被災地に入り、記憶を手がかりに、復興支援活動を始めている。木造家屋が流れ、コンクリートの基礎だけが残る街に対して、花を植えて花壇をつくる「基礎のまち」、阪神淡路大震災後に提出したアイデアを継承し、瓦礫を利用して防浪機能をもつ地形を造成する「鶴住居川河口堆積体」、建屋に和風屋根を載せる「福島第一原発神社〜荒ぶる神を鎮める〜」などを提案している。

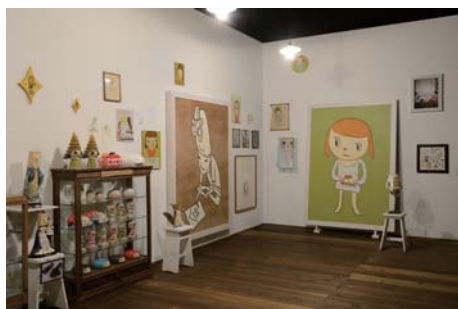
「ゼンカイハウス」1997



Nadegata Instant Party (中崎透+山城大督+野田智子) Nadegata Instant Party (NAKAZAKI Tohru + YAMASHIRO Daisuke + NODA Tomoko)

中崎透 (1976年茨城県生まれ)、山城大督 (1983年大阪府生まれ)、野田智子 (1983年岐阜県生まれ) の3人によるアーティスト・ユニット。2006年より活動を開始。東京を拠点に活動。地域コミュニティにコミットし、その場所や状況において最適な「口実」を立ち上げる。口実化した目的を達成するために、多くの参加者を巻き込みながら、ひとつの出来事を「現実」としてつくりあげていく。「口実」によって「現実」が変わっていくその過程をストーリー化し、ドキュメントや演劇的手法、インスタレーションなどを組み合わせながら作品を展開している。代表作に2010年青森公立大学国際芸術センター青森での100名を超える市民スタッフと共に地元メディアをも巻き込んだ24時間だけのインターネットテレビ局《24 OUR TELEVISION》や、2011年パース (オーストラリア) Perth Institute of Contemporary Artsでの《Yellow Cake Street》では、架空のオーストラリア家庭料理「イエローケーキ」のレシピを地元シェフや市民と考案し、期間限定のケーキ店の開業を実現させた。

《24 OUR TELEVISION》2010
青森公立大学 国際芸術センター青森 (ACAC)
© 2010 Nadegata Instant Party



奈良美智 (なら よしとも / NARA Yoshitomo)

1959年青森県生まれ。東京を拠点に活動。1985年愛知県立芸術大学美術学部を卒業後、1987年同大学院修了。1988年ドイツ国立デュッセルドルフ芸術アカデミーに入学。2000年8月ドイツから帰国する。1990年代半ばより名古屋でも定期的に発表をしていた。1995年名古屋芸術奨励賞受賞、1998年カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) で3ヶ月間客員教授を務める。その後東京での活動を経て、2005年より栃木県在住。2006年度武蔵野美術大学客員教授。国内外で個展は多数。ニューヨーク近代美術館に作品が所蔵される日本の現代美術を代表するアーティストの一人。脱みつける子供をモチーフにしたドローイングや絵画で知られるが、grafとの建築的なコラボレーション、そして陶芸にも取り組むなど、新しい試み続けるアーティストである。2013年芸術選奨文部科学大臣賞 (美術部門) 受賞。

《2011年7月の僕のスタジオから / 水戸での展示を經由して2012年7月の横浜へ》2012
photo: 広瀬達郎 (新潮社)
courtesy of Tomio Koyama Gallery

名和晃平 (なわ こうへい / NAWA Kohei)

1975年大阪府生まれ。京都を拠点に活動。1998年京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻を卒業。2000年同大学院美術研究科彫刻専攻修了。2003年同大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。2003年キリンアートアワード2003奨励賞受賞。2010年第14回アジア・アート・ビエンナーレ・バングラデシュ2010最優秀賞受賞。2011年東京都現代美術館で個展「名和晃平・シンセシス」開催。ビーズやプリズム、発泡ポリウレタン、シリコンオイルなどの現代的な素材を用いて、造形の新たな可能性を切り拓く注目の若手アーティスト。とくに彼は画素のピクセル (Pixel) と細胞のセル (Cell) を合体させた造語「PixCell」、すなわち「映像の細胞」というべき概念を提唱し、インターネットで購入した動物剥製などの表面を大小のガラス球で覆いつくし、情報化時代におけるモノの存在やそれに対するわれわれの知覚を鋭く問いかける。また最近では京都にて、建築家、写真家、デザイナーらと、横断的な創造活動を行うプラットフォーム、SANDWICHを展開している。

《PixCell-Double Deer#4》2010
photo: 表恒匡 (SANDWICH GRAPHIC)
courtesy of SCAI THE BATHHOUSE





新美泰史 (にいみ たいし / NIIMI Taishi)

1975年愛知県生まれ。愛知県を拠点に活動。2005年以降、名古屋で発表活動をしてきたが、近年、愛知県外でも、発表することが多くなってきた。10メートルのケント紙に水性ペンで細かく隙間なく描き続けるなど、通常のアーティストではやらないようなスタイルで作品を制作する。水性ペンによる描線の一つ一つは決して機械的なプロセスで作られたものではなく、筆圧を一定化して作られたものである。これは「ウラノス」と彼が親しみを込めて呼ぶ、ギリシア神話に登場する神の姿である。作品タイトルは「犬」でも同じ姿が繰り返し登場する。版画にも見えてしまう、描線の太い作品は、小さなドローイングを拡大しながらも、機械による拡大コピーによって起こる細部をカッターで切り込みながら、「型紙」を経由してアクリル絵の具で塗り込んだものである。今回はこの「型紙」による作品のシリーズを展示する予定。

〈犬シリーズ9 (犬)〉2010
courtesy of Gallery Ham and Yumiko Chiba Associates



西岳拓貴 (にしたけ ひろき / NISHITAKE Hiroki)

1984年長崎県生まれ。東京を拠点に活動。2008年愛知県立芸術大学卒業後、2010年東京藝術大学大学院修士課程修了。東京藝大在学中、フランス・ナントビエンナーレESTUAIREの河口プロジェクトに参加。ナントからサン・ナゼールまでの道約50キロの区間で、ラテックス（液体のゴム）を塗って巻き取っていくプロジェクト「ROAD OF SEX」を実施した。2012年の愛知県美術館のAPMoA Project, ARCHにおいて発表した「ROAD OF SEX Tokyo >> Aichi」では、東京から愛知までの道のりでそのプロジェクトを行った。彼はそこで試みているのはいわば身体を用いた大地とのやり取りであり、場所の記憶を一つの塊へと巻き取っていく行為である。

「ROAD OF SEX Tokyo >> Aichi」2012



丹羽良徳 (にわ よしのり / NIWA Yoshinori)

1982年愛知県生まれ。東京を拠点に活動。多摩美術大学映像演劇学科卒業。不可能性と交換を主軸とした行為や企てを路上などの公共空間で試みることで、社会や歴史へ介入する作品を制作。東ベルリンの水たまりを西ベルリンに口で移しかえる《水たまりAを水たまりBに移しかえる》(2004)など肉体を酷使した不毛な交換行為に始まり、震災直後の反原発デモをひとり逆走する《デモ行進を逆走する》(2011)や、都市の抗議活動を無関係な観光地まで延長させた《首相官邸前から富士山頂上までデモ行進する》(2012)など、自身の状況を転置することで眼に見える現実を解体し、「公共性」という幻想のシステムの彼岸を露出させる新たな物語を作り出す。近年は共産主義の歴史への興味から社会主義者を胴上げしようとする現地の共産党と交渉する《ルーマニアで社会主義者を胴上げする》(2010)やソビエトが解体されたロシアの一般家庭を訪問してレーニンを捜し続ける《モスクワのアパートでウラジーミル・レーニンを捜す》(2012)など、移り行く国家や歴史の一端を往来するプロジェクトを展開している。

〈デモ行進を逆走する〉2011
© Yoshinori Niwa
courtesy of Ai Kowada Gallery



クリスティナ・ノルマン (Kristina NORMAN)

1979年タリン（エストニア）生まれ。タリンを拠点に活動。ノルマンはエストニア美術アカデミーで学び、現在、教鞭をとっている。一つの場所に関わる記憶を題材にして、映像を中心として複数のメディアを含むインスタレーションの形で伝える。今回の出品作品《戦後》は、第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2009)において、エストニアの代表として発表したノルマンの代表的プロジェクトである。1991年にソビエト連邦から独立したエストニア政府は、タリンの中心地区に1947年に設置されたパブリック彫刻を、2007年に郊外に移設する。このことにロシア人コミュニティが異議申立てをする。この作品は、ありふれたパブリック彫刻の成り行きを、ビデオ、彫刻と写真を用いて、過去と現在を多面的に示すもので、政治に翻弄されるその彫刻と場所を巡るストーリー展開で、コミュニティにおけるパブリック彫刻とパブリックなものを持つその象徴的な意味が明らかになる。

〈戦後〉2009
Installation view at The Baltic Triennial of International Art, Vilnius, Lithuania



岡本信治郎 (おかもと しんじろう / OKAMOTO Shinjiro)

1933年東京都生まれ。東京を拠点に活動。独学で美術を学び、1950年代半ばからアンデパンダン展に出品。それまで主流であった絵画表現を否定するアヴァンギャルド絵画の旗手として登場した。筆触のない乾いた線による線描と、シンプルで鮮やかな彩色の組み合わせが特徴である。彼の画業の中に繰り返し登場する人物のユニークなキャラクター作りも含めて、社会や文化に対する辛辣な批評を織り込んだ絵画をエネルギーに作り続けてきた。2011年に渋谷区立松涛美術館で開催された個展「空襲25時」は戦争を主題としていた。中でも、大作《ころがるさくら・東京大空襲》は、2001年にニューヨークで起こったテロ攻撃9・11を契機にして、彼自身が描くことを封印していた、少年時の自らが観た1945年の東京大空襲を描いたもの。同じモチーフが執拗に繰り返されるその画面上には、同時に歴史上のさまざまなテキストや事件名が描き込まれている。繰り返し描かれたモチーフとその細部に幻惑される体験と、読書体験のように文字を読みこんでいく知性的な体験とが鑑賞者の中で共存する。

《ころがるさくら・東京大空襲》2006
渋谷区立松涛美術館「空襲 25時」展(2011)での展示風景
photo: 椎木静寧
courtesy of the Shoto Museum of Art



オノ・ヨーコ (ONO Yoko)

1933年東京都生まれ。ニューヨークを拠点に活動。哲学を研究後、20歳のときに渡米。1960年にチェンバース・ストリートにあった彼女のロフトを先鋭的なパフォーマンスに開放し、1950年代の彼女の概念的な作品を展示。1966年に活動の拠点をロンドンに移す。同年11月に個展を開催した際、その会場でビートルズのメンバーであったジョン・レノンと出会う。レノンと共同での「ベッド・イン」「戦争は終わった」(いずれも1969年)のイベントの開催後も、社会に対するメッセージ性の強い先鋭的なコンセプトアーティストとして、そして音楽家、平和運動家として高い評価を受けている。2009年6月に第53回ヴェネツィア・ビエンナーレで生涯業績部門の金獅子賞を受賞。

photo: © Synaesthete
courtesy of Yoko Ono



打開連合設計事務所 (Open United Studio)

2001年設立。台南を拠点に活動。1972年生まれの劉國滄が率いる打開連合設計事務所 (Open United Studio) は2006年、第10回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展に作家として参加し、2011年の第54回ヴェネツィア・ビエンナーレでは台湾パビリオンの展示デザインを担当した。代表作の《Blue Print》は、台南の道路拡幅によって削られた築100年の建物のリノベーションである。切断されむき出しになった壁に室内の断面パースが描かれ、さらに梁や家具が路上に飛びだし、失われた都市の記憶を喚起する。同シリーズの作品は、ベルリン、深圳・香港都市 / 建築ビエンナーレ、台中の国立美術館でも発表された。コンペで勝利した安平の「Tree House」(2003)は、廃墟と化し、樹木に浸食された倉庫群を解体するのではなく、復元するのではなく、鉄のフレームを縦横に絡ませる。ほかにも家型を随所に散りばめた「JJ-W HOTEL」の増改築を手がけ、アートと架橋するリノベーションを得意とする建築家である。

《Blue Print》2004
courtesy of OU studio



コーネリア・パーカー (Cornelia PARKER)

1956年イギリス生まれ。ロンドンを拠点に活動。近年、彼女の作品は、私たちがコントロールできない物事に形を与えたり、気まぐれなものを抑制したり、「台風の目」のような静かで瞑想的なものへと置き換えたりすることに向けられている。彼女はスチームローラーで押しつぶされたり、ひどく痛めつけられたり、崖から落ちたり、爆発をしたりする、漫画に見られる「死」の数々を模倣しているかのような、我々の世界における過程に関心がある。視覚と言葉による暗示の組み合わせによって、彼女の作品は文化的な隠喩や個人的な連想を誘発する。何の変哲もない日常のものが、何か説得力のある驚くべきものへと変容する。2005年テキサスのフォートワース近代美術館「フォーカス：コーネリア・パーカー」展、サンフランシスコのイェルバ・ブエナ芸術センター「コーネリア・パーカーによるニュー・ワーク」展、2007年バーミンガムのIKON、2008年ペルーのリマ美術館「ネバー・エンディングス」展、2010年バルティック・センター「ダウトフル・サウンド」展及び「ゲーツヘッドとノー・マンズ・ランド」展、「二つの部屋」展、2011年ヨークのセント・マリアズ教会にて、テート・ギャラリーとの提携で開催された「30枚のシルバー」展など世界中で多くの個展を開催。

《Perpetual Canon》2004
courtesy of the artist and Frith Street Gallery, London
Collection Fundación "la Caixa"



ニラ・ペレグ (Nira PEREG)

1969年イスラエル生まれ。テルアビブを拠点に活動。1989年から1993年までニューヨークのクーバー・ユニオンで学び、2000年にエルサレムのベツァレル美術デザイン学院で美術修士号を取得。主な個展に2012年クンストハレ・デュッセルドルフ、2011年ハーシュホーン美術館、2010年テルアビブ美術館 (Nathan Gottesdiener Foundation Israeli Art Prize受賞) 他、グループ展多数。ニラ・ペレグは、文化、宗教、それらに伴う暗黙の社会的慣習や、普段気に留めない人々の行動パターンが、その社会構造に深く裏打ちされていることをビデオ・インスタレーションや写真作品によって表出する。ペレグのアプローチは観察とドキュメンタリーを基調としているものの、日常的なかの他者とその行為を見つめ直し、そこに綿密な音響効果を施すことによって、何気ない風景はどこか劇場性を帯びる。彼女は社会的規範や権力構造や習慣があらゆる個人の日常生活を規定していることを提示し、特に《Sabbath》では、コミュニティといった同質性を保持することが他者に対して排他的に働かぬことを、見る者に問いかける。

《Sabbath》2008
courtesy of the artist and Braverman Gallery



ダン・ペルジョヴスキ (Dan PERJOVSCHI)

1961年ルーマニア生まれ。ブカレストを拠点に活動。2004年ジョージ・マチューナス賞受賞。主な個展に1999年第48回ヴェネツィア・ビエンナーレのルーマニア館代表 (subRealと同時展示)、2006年ロンドンのテート・モダン、2007年ニューヨーク近代美術館を含む他、2005年第9回イスタンブール、2007年第52回ヴェネツィア、2008年第16回シドニー、2009年第10回リヨンなど多数のビエンナーレへ参加。日々マスメディアを賑わす世界情勢のニュースを素材とした、大規模なウォール・ドローイングで国際的に知られる。グローバル化した現代社会に散見される不均衡性に対する、ユーモアを織り交ぜた批評的かつシニカルな視点が秀逸なアーティスト。1989年のルーマニア革命による激動の転換期を経験したペルジョヴスキは、チャウシェスク独裁政権崩壊後の民主化と同時に、西側諸国のアートを含む情報の波に一気に晒された。ニュース、新聞、カタログなど情報のアーカイブと並び、主観的な美術史の重要性を主張する彼の実践は、自明と思われた体制に疑問を投げかける。その作品は現代の風刺漫画であるのみならず、世界中で絶えない政治紛争、経済格差、共産主義と資本主義の駆引き、グローバリズム、武器と金、そしてアートの制度にまつわる政治と権力といった諸問題の根源に誰もが関与していることを、説明不要の視覚言語で表出する。

Installation view at "Europe XXL" Lille France, 2009
photo: Maxime Dufour
courtesy of the artist



ウィット・ピムカンチャナポン (Wit PIMKANCHANAPON)

1976年タイ生まれ。バンコクを拠点に活動。1992年バンコク、チュラロンコン大学建築学部卒業。1994年イギリス、メイドストーンのセント・インスティテュート・オブ・アート&デザイン、ヴィジュアル・コミュニケーションで修士号取得。建築的な視点から、ある空間や素材やマルチメディアの特性を読み込み、そこに地域や場の固有性を反映させ、見る者に気づきをもたらす空間へと変容させる。また、メディア・テクノロジーと日用品を組み合わせた独自のメカニズムによって、人々が作品を共有する場を創出する。2002年に日本人建築家、遠藤治郎と共に、音楽、デザイン、建築領域を融合したソイ・ミュージックならびにソイ・プロジェクトを設立。2007年シャーザー・ビエンナーレ (ソイ・プロジェクト)、2008年シンガポール・ビエンナーレ、2009年第6回アジア・パンフィック・トリエンナーレなどアジアの大型国際展に参加する一方、日本では2004年国際交流基金主催「Have we met?」展への出品以降、2005年横浜トリエンナーレ (ソイ・プロジェクト) や2008年横浜黄金町バザールなどへの参加でも知られる。

《Mist》2011
Installation view at Central Plaza, Chiang Rai, Thailand
courtesy of the artist



ニコラス・プロヴオスト (Nicolas PROVOST)

1969年ロンス (ベルギー) 生まれ。ブリュッセルを拠点に活動。1994年ベルギーのセント王立美術アカデミー卒業。実験映画の文脈に連なる短編や、中・長編の劇映画、映像インスタレーション作品まで、多様なスタイルの作品を制作し、国際的な映画祭から美術展まで、様々な機会を通じて発表している。その作品は、映画を成立させている文法に着目して、その構造を露わにするもので、観る者に映像とは何かを意識させ、再考を促す、知的なアプローチに基づいている。近年では《プロット・ポイント》(2007) など、過去の映画から引用した映像を、本来の作品とは異なる文脈で再構築するファンド・フッテージと呼ばれる手法を摸して、自らハリウッド映画風のショットを撮影、編集した、手の込んだパロディ的ニュアンスの作品も発表。日本ではイメージフォーラム・フェスティバル2007で2作品が紹介された後、あいちトリエンナーレ2010映像プログラムで11作品をまとめた形で上映している。あいちトリエンナーレ2013では、前述の《プロット・ポイント》、《スターダスト》(2010) とともに、三部作 (トリロジー) を構成する、日本映画を再編集し、東京でも撮影された最近作である《東京ジャイアンツ》(2012) を加え、三本まとめて、上映する予定。

《東京ジャイアンツ》2012



ワリッド・ラード (Walid RAAD)

1967年レバノン生まれ。ニューヨークを拠点に活動。主にビデオ作品、写真、文章を制作し、レバノンの現代歴史、特に1975年から1991年のレバノンの内戦を主題とした作品を発表してきた。ラードの作品は、レバノン内戦中の集団的トラウマや意識を表象するものとして、そして身体的・心理的暴力や不条理を内在する記録としても機能する。1999年から2004年までは、アトラス・グループという架空の財団を創立し、レバノンの現代歴史を研究し記録していくプロジェクトを立ち上げる。内戦中執筆されたもの、内戦後に見つかったもの、そして新しく制作した記録媒体を集積させたアーカイブの形式を使い展示する活動をおこなった。複雑な出来事の本質を正確に知ることの可能性と不可能性の両面を突きつけるような作品を作り続けている。

《Scratching on things I could disavow_plate 1 (2,3,4)》1989
 © Walid Raad
 courtesy of Paula Cooper Gallery, New York

フィリップ・ラメット (Philippe RAMETTE)

1961年イオンヌ地方のオクセール（フランス）生まれ。パリを拠点に活動。ユーモラスでアイロニカルな場面を示すドローイングを数多く作るほか、荒唐無稽とも言えるアイディアドローイングを作り、そのユニークなアイデアを実現する、身体を拡張する道具を作り、それを身体と組み合わせることによって、彼自身が驚くべきパフォーマンスを行い、その行為が写真として記録される。自然や建物と対決するような、これらの反自然的で身体的なパフォーマンスを、現代の鑑賞者はコンピュータグラフィックスではないか、とつい考えてしまうが、そうではない。これらの写真はユーモアを含みつつも、ヒロイックなまでに人間の更なる可能性を暗示している。



リアス・アーク美術館 (Rias Ark Museum of Art)

1994年にオープンした宮城県気仙沼の美術館。漁業や津波など、地域の歴史文化を紹介するほか、東北のアーティストの展覧会を開催してきた。東日本大震災のときは、丘の上であり、津波の被害は免れたが、学芸員たちが被災したほか、美術館が救援物資の保管場に使われたり、現場で被災の記録をとる特別業務などを遂行し、1年4ヶ月の閉館を余儀なくされた。リアス・アーク美術館は地方の文化施設として、震災後がまさに歴史の瞬間となり、未来に対して記憶を伝えていく役割を背負っている。学芸員が歩きまわって、震災直後から撮影された膨大な写真資料、破壊された街で収集された被災物などが、今後どのように展示されるのか。開館以来ここで勤務し、三陸の津波文化史を研究している山内宏泰が中心になって、被災地のリアス・アーク美術館が整備している東日本大震災の記録と展示は、長期的に伝承されるべき記憶について重要な指針を示すだろう。

《収集した東日本大震災による被災物》
 撮影場所:リアス・アーク美術館敷地内保管場所
 photo: 山内宏泰
 courtesy of Rias Ark Museum of Art



リゴ23 (Rigo 23)

本名リカルド・ゴウヴェア。1966年ボルトガル領マデイラ島生まれ。アメリカのサンフランシスコに活動の拠点を移して20年が経過。活動は移動型で、世界各地のコミュニティの生活空間に深く入り込むことから作品制作が始まり、彼は社会平等の問題に取り組む。彼の作品はまさに「その時」のもので、協働する人々との関係から生まれる。とはいえ、彼は歴史を否定しない。それはコミュニティの記憶を呼び起こす誇りの部分であり、不平不満の部分でもあるから。コミュニティの資産としての過去のドキュメンテーションを利用することもある。彼の野望は、歴史の正統的な語り方と関わることであり、共有されて、その語り方が形づくられていった出来事、別の語り方を伝えることである。さらに地理を無視しない。それは世界各地で離れ離れにはなっているものの、それぞれの場所における社会的不平等が同一パターンを再構成するからである。そして、場所の直接的なコンテキストも無視しない。公共の空間は、常に政治的に決定づけられるという認識のもとに、作品がその空間を新たに方向付け、更新することを目指す。

《One Tree》1996
 courtesy of the artist



アリエル・シュレジンガー (Ariel SCHLESINGER)

1980年エルサレム（イスラエル）生まれ。ベルリンを拠点に活動。1999年から2003年まで、エルサレムのベツァレル美術デザイン学院で学ぶ。イスラエルやドイツの国外でも、個展を開催、グループ展にも数多く参加している。

シュレジンガーは、ガスボンベ自体のガスが点火されてその胴体部分を焼き続けるように見える作品などで、今にも目の前で爆発するのではないか、というカタストロフの危険な状態を示すことで、鑑賞者に心理的な緊張を強いる。しかし、「そんなはずはない」という、かりそめのカタルシスという二律背反的な心理状態へも導く。数枚の紙がテーブル上で立ち上がってダンスをしているようなユーモラスでメカニカルな作品も作る。いずれも、不穏さを強く感じさせるメカニズムと、そこで用いられる具体的な動きと素材の組み合わせが、緊張感を作り出し、同時にその緊張からのカタルシスをユーモラスに示す。こうした彼の作品群に、彼を感じる世界の政治状況のメタファーを見て取るのも不思議ではない。

《untitled (bicycle piece)》2009



カスパー・アストラップ・シュレーダー+BIG (Kaspar Astrup SCHRÖDER + BIG)

シュレーダーは、1979年デンマーク生まれ。ビジュアル・アーティスト/デザイナーとして、2004年に自身の会社Kasparを設立。コペンハーゲンを拠点に活動し、映画祭で受賞多数。映像作品の《MY PLAYGROUND》では、周囲の都市環境を利用しながら、走る、登る、跳ぶなどのダイナミックな動作を行うバルクールをテーマにしている。デンマークの建築集団、BIGの代表であるジャルケ・インゲルスは、バルクールを行うTeam JiYoに興味をもち、彼らを自身の建築作品に案内し、2009年からシュレーダーと協働して映像制作を行った。インゲルスは、レム・コールハースの事務所OMAの勤務を経て、2006年にBIGを設立。彼らは、代表作である上海万博のデンマーク館や複合施設「8House」では自転車の移動も前提とした動線を組み込み、歩行とは違うスピードでの空間体験を生みだしている。通常とは異なる身体の動きによって、空間の隠れた可能性を発見する行為は、バルクールと共通するだろう。

《MY PLAYGROUND》2009
courtesy of Kaspar Astrup Schröder



ソ・ミンジョン (SEO Min-jeong)

1972年釜山（韓国）生まれ。ベルリンを拠点に活動。ソウルの弘益大学と東京の多摩美術大学大学院で版画を学んだ後、2003年から2008年までドイツのシュトゥットガルト州立アカデミーで美術を学ぶ。複数の文化を横断しながら、主題を作品のなかに集約するミクストメディアによるインスタレーションを発表している。

物語性のある建物、歴史的な事件現場、社会構造のために疎外された地域などに関心を寄せるソ・ミンジョンは、これまでシリーズ作品「Sum in a Point of Time」（ある時点の総体）で、ドイツの美術館の展示空間や韓国の売春宿といった実在する建築物をモチーフにしてきた。発砲スチロールで約3/4のサイズに緻密に再現された模型をいったん壊し、それを会場内で一時的に解体された瞬間のように再度組み立て直し、展示する。いつか何らかの理由で失われてしまうかもしれない建物や人々の歴史と記憶の脆さを実際に体感できる作品をつくり出すことで、建物とそこに携わる人々がつ「過去」、本来は留めることができない「瞬間」、私たちが生きる「現在」といった異なる時点が重なり合う場を創出する。あいちトリエンナーレ2013では、名古屋市政資料館の地下留置所をモチーフにした新作を展示予定。

《Summe im Augenblick》2010



志賀理江子 (しが りえこ / SHIGA Lieko)

1980年愛知県生まれ。宮城県を拠点に活動。1999年に渡英。2004年ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン卒業。被写体と土地の内にある潜在的なイメージを闇の中からえぐり出すような力強い構成写真、その闇のなかで発光するような独特のイメージで注目を集める。2007年度文化庁在外派遣研修生としてロンドンに一年間滞在。写真集『Lilly』『CANARY』（共に2007）で2008年木村伊兵衛写真賞受賞。2009年にはニューヨーク国際写真センター主催Infinity Award 新人賞受賞。帰国後、宮城県名取市北釜地区に居を構え、地域カメラマンとして祭事等を記録すると同時に北釜の口述史を作成開始。2012-13年、自らの身体を懸けて写真と北釜と関わってきた4年間の試みを包括した個展「螺旋海岸」がせんだいメディアテークで開催され大きな反響を呼んだ。会期前に行われた全10回の作家自身によるレクチャーは写真実践を言語化する試みであり、テキスト集『螺旋海岸 | notebook』（2013）として刊行された。あいちトリエンナーレ2013は、志賀の生地岡崎市における初の大規模な展示となる。

「螺旋海岸」せんだいメディアテーク展示風景、2012-2013
courtesy of the artist



下道基行 (したみち もとゆき / SHITAMICHI Motoyuki)

1978年岡山県生まれ。名古屋を拠点に活動。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。2003年東京総合写真専門学校研究科中退。砲台や戦闘機の格納庫など日本各地に残る軍事施設跡を4年間かけて調査・撮影し、出版もされた「戦争のかたち」シリーズ(2001-2005)や、アメリカ・台湾・ロシア・韓国など日本の植民地時代の遺構として残る鳥居を撮影した代表的なシリーズ「torii」(2006-2012)など、その土地のフィールドワークをベースにした制作活動で知られる。彼の作品は、風景のドキュメントでも、歴史的な事実のアーカイブでもない。生活のなかに埋没して忘却されかけている物語、あるいは些細すぎて明確には意識化されない日常的な物事を、写真やイベント、インタビューなどの手法によって編集することで顕在化させ、現代の私たちにとっていまだ地続きの出来事として「再」提示するものである。2012年に開催された光州ビエンナーレでは新人賞を受賞。あいちトリエンナーレ2013では、愛知県内でのフィールドワークの成果を示す新作を展示予定。

シリーズ「bridge」(2011)より



シュカルト (Škart)

1990年結成。セルビアを拠点に活動。ペオグラードで建築を学んでいたドラガン・プロティッチとジョルジエ・バルマゾヴィッチによって結成された。二人は独裁政権のもとで繰り広げられていた民族紛争の時代に、そこで生活する人々のなかに入り込む実践的な活動をおこなってきた。初期の活動では、個人的な悲しみの感情を綴った本の出版、「恐怖」や「休息」などの文字が書かれた配給券《サバイバル・クーポン》を街で配るプロジェクト、歌手になりたい人々を合唱団として組織し病院や難民キャンプのような歌が必要な場所に連れて行くプロジェクトを実施してきた。またその後も、芸術表現から離れて伝統的な家庭の刺繍によって現代社会に生きる人々の気持ちを表現することや、どこにでもある素材によって植物と一緒に移動できる装置をつくるなど、日常的な個人の感情と結びつくデザインを提案している。彼らは自分たちのコンセプトを「人々の関係性のためのアーキテクチャー」と述べ、詩とデザインの領域のあいだで活動している。

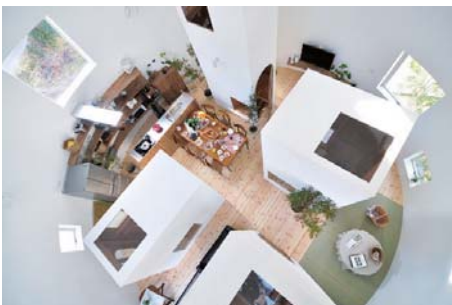
《dish-familysh》2010
plant-o-bile
12th Venice Architecture Biennale
photo: skart archive



フロリアン・スロタワ (Florian SŁOTAWA)

1972年ローゼンハイム(ドイツ)生まれ。ベルリンを拠点に活動。スロタワは、その制作スタイルを、ものを並べ替えること、あるいは配置されたコンテキストを再設定することとして、何もそこに加えることがない。彼の最初のシリーズは自分の家財道具を美術館の展示室に持ち込んで組み上げることであった。あるいは、美術館の展示室と自らの部屋の家財道具を一時的に交換して展示する。ホテルの一室の家具を、宿泊している間だけ配置換えして、それを撮影するシリーズもある。また、大きな公園に設置されたパブリックアートの数々を大きさ順に並べなすなど、大掛かりなものもある。あいちトリエンナーレ2013では、美術館の展示室内を、アーティスト自身が競技アスリートのように走り抜けて計測する映像作品のシリーズを展示予定。アーティストが走り抜ける姿とともに、美術館の展示室が運動感とスピード感を持ってガイドされ、展示室のこれまでにない見え方が提示される。

《Museums-Sprints (Alte Pinakothek München, 1:13.26 min)》2001
courtesy of Galerie Nordenhake, Berlin/Stockholm; Sies & Hoeko, Duesseldorf
© VG Bild-Kunst Bonn 2012



studio velocity / 栗原健太郎+岩月美穂 (studio velocity / KURIHARA Kentaro + IWATSUKI Miho)

2006年設立。岡崎市を拠点に活動。栗原健太郎(埼玉県出身)と岩月美穂(愛知県出身)はともに1977年生まれ。石上純也建築設計事務所勤務を経て、studio velocityを設立。前衛的なデザインとかわいらしさが共存する新しい感覚の作品によって、国内外の注目を集める若手建築家のユニットである。名古屋の美容室「曲線の小さなワンルーム」(2010)では、敷地にくしゃんと湾曲するボリュームを巧みに配置した。岡崎では、内部に小さく分節された空間を抱えた「白い山のような家」(2009)や、円形のプランの上下に別世界を展開させる「空の見える下階と街のような上階」(2012)などの住宅を手がける。第13回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2012)で展示した「愛知産業大学言語・情報共有センター」は、2013年に竣工し、彼らの最新作となる。また、ゆらぎを意味するタイトルの個展「fluctuation」(2012)では、0.25mmの極薄フィルムを垂直に自立させた構築物や、床の傷やひび割れをランドスケープに見立てたマイクロ模型など、環境に応答する繊細なインスタレーションを発表した。

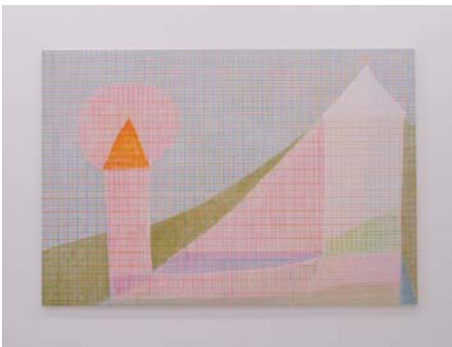
「空の見える下階と街のような上階」2012
courtesy of the artists



菅沼朋香 (すがぬま ともか / SUGANUMA Tomoka)

1986年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。名古屋芸術大学デザイン学部デザイン学科卒業。昭和61年生まれ、菅沼は、街の中に埋もれてしまった「昭和らしさ」が残る場所、人や物などを独自の視点においてリサーチし、映像作品《バックウーザ昭和》や、屋台型インスタレーション《まぼろし屋台》、そしてアートブックなどの形式で発表している。フィールドワークの手法を用いて、昭和から残る純喫茶やスナックなどに出向き、その場所では会う人々との関係を構築しながら、彼らのエピソードや記憶を拾い上げ、現代に残る昭和のかたちを探り出そうとする。また、彼女自身の昭和への憧れを表現するかのよう、自らの日常生活においても、そのファッション、生活のスタイルまでにも「昭和らしさ」は徹底されている。彼女が行うパフォーマンスもまた作品の重要な要素となっている。今回は、あいちトリエンナーレ2013の会場となる、長者町繊維卸問屋街の中に残された「昭和らしさ」を、長者町で昭和より活動している経営者らへのインタビュー等を元に掘り起こす新作を発表する予定。

《バックウーザ昭和》2011
photo: 大畑沙織



杉戸 洋 (すぎと ひろし / SUGITO Hiroshi)

1970年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。1992年愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業。1990年代半ばにはその実力が認められて海外でも紹介されていた。2001年に愛知県美術館で個展。2006年にアメリカのフォートワース近代美術館で個展「Focus」を開催。2011年に青木淳との二人展が青森県立美術館で予定されていたこともあり、彼はその準備のために名古屋と青森の間を頻繁に通っていた。展覧会は震災のために中止されたが、2012年にケンジタキギャラリーで発表された近作群には、彼が見ていた東北の風景と、彼が訪れた美術館で見た絵画が登場している。

《house on the hill》2012



ミカ・ターニラ (Mika TAANILA)

1965年ヘルシンキ (フィンランド) 生まれ。ヘルシンキを拠点に活動。ヘルシンキ大学で文化人類学を学んだ後、ラハティデザイン研究所の映像学科を卒業。科学技術の進歩に関心を寄せるターニラの作品は、記録映像と実験映画の両方の側面を持ち、現実とファンタジーを行き来する。テクノロジーと芸術が融合したユートピアや近未来的ビジョンは、一方で考古学や科学ファンによるアマチュアフィルムのような好奇心も覗かせながら、さまざまな角度から社会の中心に据えられた技術開発を観察、検討している。2012年ドクメンタ13で発表された《The Most Electrified Town in Finland》(2004-2012)は、フィンランド南西部ユーロキ自治州のオルキルオト島に2014年完成予定の原発「オルキルオト3」を撮影した作品。2基の原子炉を持つこの施設は、西欧ではチェルノブイリ原子力発電所事故後に作られた最初の原発となる。本作にはその賛否を議論するアプローチは見出されず、人口6千人ほどの小さな町の景観のなかで、新たな原子炉が建設されていく様が淡々と映し出される。ターニラが2004年から取り組んだ本作は、見る者に国家権力と地域の関係、ならびに経済効果を生む原子力エネルギー依存に陥った町の運命について考えさせる。あいちトリエンナーレ2013でも展示予定の本作には、主要都市と地方都市の間の格差も暗示され、日本でも福島を始め、原子力発電所を受け入れた多くの地方で生じる問題を浮き彫りにしている。

《The Most Electrified Town In Finland》2004-2012
photo: Anders Sune Berg in dOCUMENTA (13), Kassel, Germany, 2012



高橋 匡太 (たかはし きょうた / TAKAHASHI Kyota)

1970年京都府生まれ。京都を拠点に活動。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。90年代後半より光と映像を用いた作品を数多く発表する。屋内空間でのインスタレーションから、パフォーマンスとの共同制作、そして建築物への大規模なプロジェクションと多岐にわたる。とりわけ、建築物のライトアップでは、水玉やストライプといった幾何学模様、映像、色彩を自在に組合せ、建築を大胆に解釈、ダイナミックに変貌させてみせる。十和田市現代美術館の常設作品《いるとりどりのかけら》(2008)では、白い箱が並んだような美術館建築の面ごとに異なる色の光を当て、時間とともに移り変わる色面が幻想的な風景を生み出している。また、一人ひとりの夢が書かれた紙にLED照明を取りつけた「夢のたね」を、気球に積んで夜空に降らせ、舞い落ちた誰かの夢を持ちかえる「夢のたねプロジェクト」(2005-)をはじめ、参加型プロジェクトも多数行う。視覚的な美しさだけでなく、人の心や記憶を照らす光の可能性に挑戦し続けるアーティストである。

《いるとりどりのかけら》2008
photo: 北村光隆



竹田尚史 (たけだ ひさし / TAKEDA Hisashi)

1976年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。2004年名古屋造形芸術大学美術学科彫刻コース卒業。2006年名古屋造形芸術大学大学院環境造形コース修了。竹田は在学中から大学内に仮設のギャラリーを作り、同世代のアーティストたちと発表の場をつくっていた。落下する瞬間を切り取った浮遊するスプーンの写真、鏡の中で正しく見える反転した時計など、時間、空間や質量などの哲学や自然科学的なテーマを想定しながらも、実際には身体スケールでの展示を行っている。「世界は確かに存在する、しかしそれを確かな物にする基準ははまだ発見されていない」と語る竹田の作品は、不確かなものと確かなものとの間で行き来することで、独特のユーモアを作り出している。

《ダブルフィクション》2013



ブーンスイ・タントロンシン (Boonsri TANGTRONGSIN)

1978年タイ生まれ。タイとスウェーデンを拠点に活動。1999年にバンコク大学、2007年にマルメ・アート・アカデミー（スウェーデン）を卒業。今回彼女は約11分間の《Superbarbara Saving the World（スーパーバーバラ世界を救う）》（2012）を展示する。数章からなる本作は、世界で頻発する、決して解決されることのない問題を扱った手書きアニメーションである。各章で展開される問題の一つ一つは誰にとっても理解できる。なぜなら、いたる所で起こっているだけでなく、解決しようと試みる人々の間に、同じフラストレーションを与えているからである。作家本人は以下のように解説する。「スーパーバーバラはアダルトグッズから世界の救世主へと変身した旧式のセックス・ドールです。彼女は自らの方法で問題を解決します。スーパーバーバラはヒーローであるとともに、問題の犠牲者でもあります。時折、これらの問題を解決しようとする人が現れます。しかし、遅かれ早かれヒーローは姿を消すだけで、そのトラブルは依然として続いていくのです。」

《Superbarbara Saving the World》2012
courtesy of the artist



渡辺 豪 (わたなべ ごう / WATANABE Go)

1975年兵庫生まれ。東京を拠点に活動。2000年に愛知県立芸術大学美術学部油画科卒業。2002年愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。2010年に愛知県美術館で個展「現代美術の発見VI 渡辺豪 白い話 黒い話」を開催。ライトボックス形式の平面作品においても、動画においても、コンピュータを使っての緻密な作業によって作り上げられた漂白されたようなモチーフが特徴的である。その表現は、その特異な人物像も含めて、動画であれば、そのゆっくりとした動き、静止画であれば、かすかに付与された輝きのモチーフによって、動くものと静止したもの、生命と非生命の境界線を静かに問いかけるものにもなっている。

《"one landscape," a journey》2011



和田礼治郎 (わだ れいじろう / WADA Reijiro)

1977年広島生まれ。ベルリンを拠点に活動。2000年広島市立大学芸術学部美術学科彫刻専攻卒業、2002年同大学大学院芸術学研究科博士前期課程彫刻専攻修了。加えて、2008年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程彫刻専攻修了。その後、ドイツを中心とするヨーロッパでのグループショーに参加。石を含むさまざまな素材を彫刻の素材として扱うが、2010年より、シリーズで発表している代表的な作品は、真鍮で縁取った複層ガラスを水面と同化するよう浮かべ、水面そのものの存在を視覚化し作品化する「ISOLA（イゾラ）」である。イゾラとはイタリア語で島のこと。これは人間の身体スケールに由来する量モジュールを浮かべるもので、強化ガラス2枚の間に密閉された空気によって、水面と同じ高さに浮かぶ構造になっている。近くから見ると、空を映し出す人工的な幾何学形態であり、遠景では自然の波のきらめきのひとつに同化している。

《ISOLA》2012
Installation view at Haus am Waldsee, Berlin
photo: Bernd Borchardt
courtesy of the artist



リチャード・ウィルソン (Richard WILSON)

1953年ロンドン生まれ。ロンドンを拠点に活動。ロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーション、ホーンゼイ芸術大学やレディング大学で学ぶ。1988年と1989年に、世界でも著名な芸術賞である英国のターナー賞にノミネートされた。ロンドンのサーチ・ギャラリーが所蔵する、サンブ油で満たされた部屋の細い通路を観客が歩くことのできる作品は、英国で最も象徴的なインスタレーション作品のひとつとなっている。インスタレーションだけではなく、映像作品もつくる。80年代にはバンドを組み、音楽活動もしていた。ドイツ学術交流会のレジデンス・プログラムにより、1992年から93年にかけてベルリンに滞在。これまでシドニー、サンパウロ、ヴェネツィア・ビエンナーレや、横浜、越後妻有アートトリエンナーレなどに参加している。建築的な、空間への大胆な介入は彼の作品の特徴であり、2008年に開催されたリヴァプール・ビエンナーレでは、ビルの壁に直径およそ8メートルの円形の穴を開け、回転させるという作品で大いに話題となった。

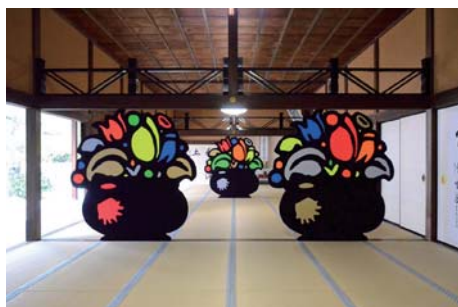
《Turning the Place Over》2007
commissioned by Liverpool Biennial
photo courtesy of Liverpool Biennial



ケーシー・ウォン (Kacey WONG)

1970年香港生まれ。香港を拠点に活動。彼は建築と美術を学んだ後、香港理工大学のデザイン学部にて教鞭をとる。数層の高いハイアートではなく、日常の延長として建築的なアートが社会にもたらす力を探求している。香港現代美術アワード(2012)など多数受賞。第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2008)の香港セクションでは、屋台のようなモバイル三輪車プロジェクト《さすらう家屋》を展示した。ほかにも香港・深圳都市／建築ビエンナーレに出品された移動するベッド《スリープ・ウォーカー》、海上に浮かぶ《漂流する家屋》、ホームレスが活用できるロボット風の彫刻など、作品は社会批評の色彩が強い。2000年以降から続く《ドリフト・シティ》は、紫禁城、ピラミッド、シュレーダー邸など、世界各地の建築の名所を訪れ、本人が摩天楼の着ぐるみをして記念撮影するシリーズだ。近年はパフォーマンス、デモ、展示企画を通じて、中国の愛国教育に対する異議申し立てやアイ・ウェイウェイの解放運動などを行っている。そうした彼の活動は、香港の揺れ動くアイデンティティの表出にもなっている。

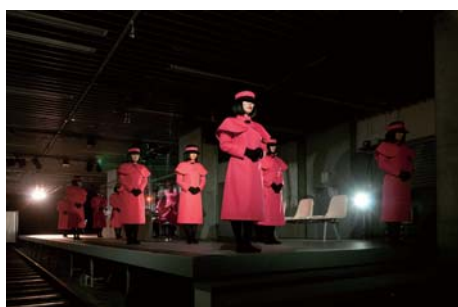
《ドリフト・シティ》2008
ユトレヒト(オランダ)
courtesy of the artist



山下拓也(やました たくや / YAMASHITA Takuya)

1985年三重県生まれ。京都を拠点に活動。2010年名古屋造形大学美術学科総合造形コース卒業。2013年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了。山下は名古屋造形大学の在学中より、愛知県内のグループショーに出品し、まちなか、展示される建物や展示空間の特性、そしてその細部を生かした立体作品を展示してきた。その展示の発想には、思いもよらない奇抜なユーモアとゲーム感覚があり、鑑賞者の関心を鮮やかに惹きつけるか、非常に困惑させる。既存のものを多く使用するその展示方法と素材に対する感覚、そして色彩感覚は、スマートさとは無縁である。空間を占拠して、ポップで土俗的ともいえる感性で押し通し、鑑賞者にいやがおうでも、作品に反応するように引き込んでいく。また、ボスカを使って描かれた小さな絵は、密度と同時に孤独を感じさせる、魅力的な作品群である。

《花瓶の絵》2012



やなぎみわ (YANAGI Miwa)

兵庫県生まれ。京都を拠点に活動。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。1990年代後半より、若い女性をモチーフに、CGや特殊メイクを駆使した写真作品を発表し、とりわけ、制服を身につけた案内嬢たちが商業施設空間に佇む「エレベーターガール」のシリーズで注目を集めた。2000年より、女性が空想する半世紀後の自分を写真で再現した「マイ・グランドマザーズ」シリーズ、少女と老婆が登場する物語を題材にした「フェアリーテイル」シリーズ等を手がける。いずれの作品にも、ジェンダー、若さと老い、美と醜といった女性を取り巻く問題への深い洞察があるとともに、語ること、場を設定することへの演劇的な関心を認めることができる。国内の公立美術館、ドイツやアメリカなど国内外での個展多数。2009年、第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。

2010年より演劇公演を手がけるようになり、2011年から新たに演劇プロジェクトを始動させた。大正期の日本を舞台に、新興芸術運動の揺籃を描いた「1924」三部作、明治後期のパノラマ館などを舞台にした「パノラマ」シリーズを美術館と劇場、双方で上演している。

「案内嬢プロジェクト」
鉄道芸術祭vol.2「駅の劇場」(アートエリアB1)2012
photo: 井上嘉和



ヤノベケンジ (YANOBE Kenji)

1965年大阪生まれ。大阪と京都を拠点に活動。幼少のときに体験した大阪万博の跡地、すなわち「未来の廃墟」を創作活動の原点と位置づけ、サブカルチャーによる造形美と物語性とを巧みに織り交ぜながら、ロボットや生活必需品などの大型機械彫刻を制作。90年代は、ガイガー・カウンターを装備した《アトムスーツ》を自ら着用し、原発事故後のチェルノブイリを訪れるなど、世紀末的なサバイバル・プロジェクトで注目を集めた。しかし、新世紀を迎えると、制作テーマをリバイバルへと移行させると同時に「太陽」をシンボルに掲げ、「未来の廃墟」から2本足で立ち上がる3mの人形《スタンダ》や、解体されたエキスポタワーの断片から生命の塔を再生させる計画など、次世代に向けてポジティブな想像力とメッセージを強く打ちだしていく。また、2010年発電所美術館での「ミュトス」展では、天井に吊り下げた水瓶に5tの水をしたため一気に放出するインスタレーション《大洪水》を手がけ、予言的なまでに時代に鋭く斬り込む作品で人々を震撼させた。そして東日本大震災後、希望のモニュメントとして、防護服のヘルメットを脱いだ6mの子ども立像《サン・チャイルド》を発表し、太陽の塔の広場や第五福竜丸展示館、モスクワやイスラエルなどの世界規模で巡回を続けている。

《サン・チャイルド》2011
courtesy of the artist



横山裕一 (よこやま ゆういち / YOKOYAMA Yuichi)

1967年宮崎県生まれ。東京を拠点に活動。武蔵野美術大学油絵科卒業後、漫画家として活動し、2004年に『ニュー土木』で単行本デビュー。横山は、人物の何らかの行為や物体の移動、変形などに伴う時間の流れを描くことを意識し、タブローではなく漫画という形式を選択している。自ら「ネオ漫画」と呼ぶその漫画作品では、自然と人工物が奇妙に融合した近未来的な風景を舞台に、特異なファッションに身を包んだ無表情なキャラクターたちが目的の不明瞭な活動を繰り返すさまが描かれる。セリフを殆ど用いずに、オノマトペと効果線を多用しながら進行するスピード感のあるコマ展開によって、まったく新しい漫画表現を確立し、国内外で高く評価されている。『トラベル』(2006)『ベビーブーム』(2009)などの国内外での単行本の刊行と並行して、2010年川崎市市民ミュージアムでの個展「横山裕一 ネオ漫画の全記録:わたしは時間を描いている」をはじめ多数の美術館やギャラリーでの展覧会に参加。

『劇画(仮題)』2012



米田知子 (よねだ ともこ / YONEDA Tomoko)

1965年兵庫県生まれ。ロンドンを拠点に活動。1989年イリノイ大学シカゴ校芸術学部写真学科卒業後、1991年ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート修士課程修了。戦争や災害や政治体制の変化などを経験した場所に潜む、可視化されない記憶や歴史をテーマにした写真作品で知られ、2008年原美術館での個展をはじめ、2007年第52回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2005年ならびに2011年横浜トリエンナーレなど数々の国際展で高い評価を受けている。フォト・ジャーナリストを目指して写真を学び始めた米田の作品は、徹底した客観性に裏打ちされている。1995年の阪神淡路大震災直後に米田の出身地に隣接する神戸周辺を撮影したモノクロ写真10点と、2004年に芦屋市内を撮影した大判カラーの写真8点で構成される『震災から10年』のシリーズは、他のシリーズ同様、添えられたキャプションによってその場の意味、10年の時間、記憶が一気に立ち上がる。そこには観察者としての距離化した視点だけでなく、見えるものと見えないもの間に横たわる過去の軌跡と記憶をなぞり、それを読み解くことによって私たち自身の存在と現代性を問いかける、米田の一貫したまなざしがある。写真に写されたイメージは見る者によって主観的に解釈されるが、負の歴史は消えない。米田の写真を二度見ることによって、見る者は写真に不在の時間と対峙する。

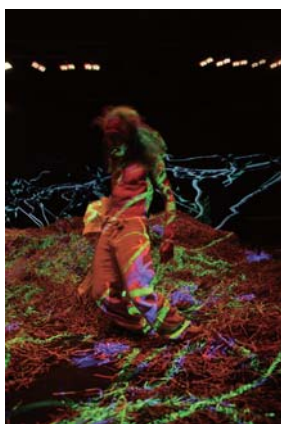
《川(両サイドに仮設住宅跡地、中央奥に震災復興住宅をのぞむ)》2004
courtesy of ShugoArts



ARICA+金氏徹平 (ARICA + KANEUJI Teppei)

ARICAは2001年、演出・美術の藤田康城、テキスト・コンセプトを担当する詩人・批評家の倉石信乃、太田省吾が主宰した元転形劇場俳優の安藤朋子らにより設立。演劇やダンスといった枠を超え、ビジュアルアートや音楽、建築やデザインなどと呼応するパフォーマンスを上演して注目を集める。カイロ国際実験演劇祭や、ニューヨークのジャパン・ソサエティー、デリーの国際演劇祭などでも公演を行った。今回上演する「しあわせな日々」はサムエル・ベケットの代表作のひとつで、特に目を引くのが主演女優が埋もれる山のような舞台美術。その「山」を、1978年生まれのアーティスト金氏徹平が設計する。金氏は、日用品などレディメイド素材を白い石膏や樹脂で覆ったコラージュの彫刻や、相異なる線画を延々とつなげてゆくドローイングなどで知られ、2009年には、30歳の若さで大規模個展を横浜美術館で開催した。テキスタイルコーディネーター・デザイナーの安東陽子が衣裳を担当する。

「恋は闇/LOVE IS BLIND」2012年
photo: 宮内勝



藤本隆行+白井 剛 (FUJIMOTO Takayuki + SHIRAI Tsuyoshi)

インディペンデントディレクター・照明デザイナーの藤本隆行は、1987年よりダムタイプに参加し、主に照明・テクニカルマネージメントを担当する。個人としての活動では、2007年、白井剛、川口隆夫、真鍋大度ら9名のアーティストと共に製作したパフォーマンス作品「true/本当のこと」を発表。海外も含めた多くのアーティストとコラボレーションを行い、LED照明をはじめとするデジタルデバイスと人体の高密度の同期化に焦点を当てた、有機的な舞台を構築している。振付家・演出家・ダンサーの白井剛は、伊藤キム+輝く未来、Study of Live Works 発案での活動を経て、現在ソロユニットAbsTをベースに、独舞から共同プロジェクトまで様々な形態で、身体と空間/時間のダンスを模索する。映像や現代音楽と親和性の強いダンスで高い評価を受け、バニョレ国際振付賞をはじめ、国内外の賞を受賞している。今回は、舞踏、コンテンポラリーダンスとデジタルテクノロジーを融合した最新作「Node/砂漠の老人」を発表する。

Showing 「Node/砂漠の老人」
photo: 前澤秀登



ほうほう堂 (Ho Ho-Do)

新舗美佳と福留麻里による身長155cmダンスデュオ。これまでに国内外20都市以上で作品を発表。2009年からは劇場から飛び出し、その日の天候や道行く人々を含め、その場所にしかない魅力や特徴を背景に、そのとき限りのサイトスペシフィックなスペシャルダンスを披露する「ほうほう堂@」シリーズを展開している。カフェ、建物の廊下、学校、トンネル、民家をはじめ、日常と隣り合わせにある面白そうな場所や、旅先で出会った場所、紆余曲折の果てに辿り着いた穴場スポットなど、月に1回さまざまな場所で踊り、YouTubeにアップ。また、ほうほう堂の振付に、複数のミュージシャンが異なる音楽を合わせることで、これまでとは違う作品の見え方を引き出す「ほうほう堂×DJs!!」シリーズを行うなど、ダンスの拡張を多種多様な方法で試みている。今回は、長者町を中心に名古屋の中心街をリサーチし、まちを舞台にその街ならではの光景、記憶、人が関わる新作を発表する。同時にその作品はウェブ上でどこからでも観る事のできる番組としても生中継配信される。

photo: 新井梨里子



イリ・キリアン (Jiří KYLIÁN)

1947年ブラハ (チェコ) 生まれ。振付家。1967年、英国ロイヤル・バレエ学校に入学し、1968年にジョン・クランコの招きでジュットガルト・バレエに入団。1973年、オランダのハーグを拠点とするネザーランド・ダンス・シアター (NDT) の振付を初めて行う。以来、同カンパニーとの関係を深め、1978年に芸術監督に就任。1999年に退任したが、50作以上をNDTと共に創作した。2011年には、映像アーティストのジェイソン・アキラ・ソマ(米国)と「Anonymous - a dance and video installation」を発表。現代バレエ/ダンスの最も重要な振付家の一人として、ますます精力的に創作を続けている。オランダ王国オレンジ・ナッソー勲章など受賞多数。キリアンの振付作品は、パリ・オペラ座バレエをはじめ世界中の名だたるバレエ団やダンスカンパニーが上演しているが、今回上演するのはサムエル・ベケットの「……雲のように……」に想を得た新作。あいちトリエンナーレ2013での公演が世界初演となる。ハーグ在住。

courtesy of the Kylian Foundation



ままごと (mamagoto)

劇作家・演出家である柴幸男（1982年愛知県一宮市生まれ、平成23年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞）の作品を上演する団体。何気ない日常の機微を丁寧にすくいとる戯曲と、演劇外の発想を持ち込んだ演出から普遍的な世界を描く。演劇を「ままごと」のように身近に。より豊かに。あいちトリエンナーレ2010 祝祭ウィーク事業出演団体。今回は「子供も大人も楽しめる作品」を創作する。実家のある愛知に長期滞在し、現在の子供たちが想像するであろう未来、その子供たちがいつか辿り着くはずの未来、さらに子供たちが大人になってもまだ続いていく未来…と、「子供の時間」の延長線上にある「大人の時間」、「大人の姿」を描き出す。「嘘（ほら話）」と「仕事」を軸に、子供と、かつて子供だった大人が、それぞれの目線で“今”を見つめ直す作品。

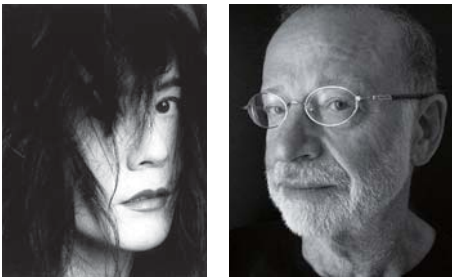
「あゆみ」2011年
 (森下スタジオ Cスタジオ)
 photo: 青木司



マチルド・モニエ (Mathilde MONNIER)

1959年生まれ。1986年に「Cru」にてパニヨレ国際振付コンクール・フランス文化省賞受賞。1994年よりラングドグールシヨンのモンパリエ国立振付センターの芸術監督を務め、異なったジャンルのアーティストたちとのコラボレーションシリーズを開始。特にジャズミュージシャンのルイ・スクラヴィスに影響を受ける。共同体の観点から身体や空間へのアプローチを行い、自閉症患者を対象とした活動に取り組んでいる。アヴィニヨン・フェスティバルにて多数の作品を発表してきた西欧のコンテンポラリーダンス界を牽引する旗手の一人。マチルド・モニエとジャン・フランソワ・デュルールの共同製作により創作された2つのデュオ、1984年の「PUDIQUÉ ACIDE」と、1985年の「EXTASIS」を、2011年に再振付した「Pudique Acide/Extasis (restaging)」をもって、待望の初来日となる。

© Marc Coudrais



向井山朋子+ジャン・カルマン (MUKAIYAMA Tomoko + Jean KALMAN)

向井山朋子はアムステルダムを拠点に活動。1991年にオランダの国際ガウデアムス演奏家コンクールで優勝して以来、ピアニストとして、国際的に活動するオーケストラなどと共演するほか、映画監督、デザイナー、建築家、写真家、振付家らとのコラボレーションを行う。近年はビジュアルアーティストとして「for you」(横浜トリエンナーレ2005)、「you and bach」(シドニー・ビエンナーレ2006)、「wasted」(越後妻有トリエンナーレ2009)などのインスタレーション作品を創作。2012年には、ダンス作品「シロクロ」(ダンストリエンナーレトーキョー2012)を創作・発表した。ジャン・カルマンは1945年パリ生まれ。1979年より、ダンス、演劇、オペラの舞台美術と照明デザインを手がける。カレル・アベル、ゲオルク・バゼリッツ、ヤニス・クネリス、アニッシュ・カプーアら美術家、マウリシオ・カゲル、ハイナー・ゲッペルスら作曲家と協働して舞台作品を制作。クリスチャン・ボルタンスキーとのコラボレーションも数多く、特に越後妻有トリエンナーレでの作品が知られている。1991年ローレンス・オリヴィエ賞照明部門を受賞。2011年には、ドラマ・デスク賞最優秀照明賞にノミネートされた。2012年より、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーのアソシエイテッドアーティスト。今回は協働で、サミュエル・ベケットの『いざ最悪の方へ』に着想したパフォーマンス/インスタレーション作品を発表する。

photo: Philip Mechanicus
 photo: 向井山朋子



プロジェクトFUKUSHIMA! (PROJECT FUKUSHIMA!) (総合ディレクション:大友良英)

東日本大震災と、震災によって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、地震と津波の被害に加え、放射能汚染という未曾有の事態を福島にもたらした。その福島から、「いまの福島」と「未来の福島」の姿を全世界に向けて発信していこうとするプロジェクト。福島出身/在住の大友良英（音楽家）、遠藤ミチロウ（音楽家）、和合亮一（詩人）の3名を代表とし、県内外から集まった有志によって2011年5月に立ち上げられた。同年8月15日に福島市内で開催した「フェスティバルFUKUSHIMA!」には約1万人が来場し、翌年は「世界同時多発フェスティバル」に拡大。その他、インターネット放送局「DOMMUNE FUKUSHIMA!」の運営、学びの場となる「スクールFUKUSHIMA!」の実施、共鳴するアーティストによる作品発表の場と支援金募集の仕組みを兼ねた「DIY FUKUSHIMA!」など、複数の活動を継続的に行っている。今回は、参加型ライブ「オーケストラFUKUSHIMA!」のあいち版を上演。

「オーケストラFUKUSHIMA!」2011年8月
 photo: 藤井光



清水靖晃 (SHIMIZU Yasuaki)

1954年静岡県生まれ。作曲家・サクソフォン奏者。1978年にアルバムデビューし、1983年、「サクソフォネッツ」名義のプロジェクトを開始。その後、パリとロンドンに活動拠点を移し、3枚のアルバムを録音する。90年代後半、J.S.バッハ『無伴奏チェロ組曲』を、史上初めてテナーサクソフォンのために編曲・演奏・録音。アルバム『チェロ・スウィーツ1.2.3』と『チェロ・スウィーツ4.5.6』を発表し、1997年に『バッハ・ボックス』でレコード大賞企画賞を受賞した。2006年、サクソフォネッツは新たに4人のサクソフォン奏者を迎え入れ、翌年、五音音階作品を収めた『ペンタトニカ』を発表。2010年にはサクソフォンとコントラバスのために編曲した「ゴルトベルク変奏曲」を初演し、好評を得た。音楽プロデューサーや編曲家としても活動し、映画やビデオ、さらにはインスタレーションやコンテンポラリーダンスなどの音楽制作も手がける。

photo: Fabian Monheim



ジェコ・シオンポ (Jecko SIOMPO)

1975年生まれ。インドネシアのジャバブラで育つ。幼少のころより伝統舞踊を学び、1994年にジャカルタ・アート・インスティテュートに入学してダンスを専攻。1999年、ヒップホップをアメリカのポートランドで学ぶ。2002年、奨学生としてドイツのフォルクスヴァンク・ダンス・スタジオにて学ぶ。インドネシアのさまざまなダンスのスタイルを学んだが、その実践にとどまらず、パプアの文化的背景を生かした独自のスタイルを追求しながら、振付作品を発表している。作品はインドネシア国内各地をはじめ、マレーシア、シンガポール、日本、ドイツ、デンマーク、オーストラリア、アメリカ、フランス、台湾、香港、韓国そしてロシアなどにて上演。パプアのダンス文化とのフュージョンという側面だけでなく、ジャカルタのサブカルチャーであるヒップホップを、自身の振付の世界に持ち込んだ。カンパニー作品としては待望の日本初公演となる。

「Room Exit (Terima Kost)」



梅田宏明 (UMEDA Hiroaki)

2002年にフランスのRencontres Chorégraphiques Internationalesのディレクターに評価され活動を海外に拡げる。その後、ヨーロッパを中心に世界各地の主要フェスティバル・劇場に招聘され、2008年にはFestival d'automne à Paris及びRomaEuropaと共同製作を行う。2011年、YCAMとの共同製作で「Holistic Strata」を発表。2009年、振付プロジェクト「Superkinesis」を立ち上げ、初のグループ作品「1. centrifugal」を、2010年にヒップホップダンサーを採用した「2. repulsion」を、2011年にバレエダンサーの振付作品「3. isolation」を発表。2010年、Prix Ars Electronica 2010 Honorary Mentionを受賞。近年はビデオインスタレーションなどへも表現活動を拡げ、あいちトリエンナーレ2010では「Haptic installation version」を発表。今回上演するアジアダンサーによる「4. temporal pattern」は、梅田にとってアジア初の劇場間共同企画により製作される最新作。

「Holistic Strata」

photo: 丸尾隆一 (YCAM)

courtesy of Yamaguchi Center for Arts and Media



ペーター・ヴェルツ+ウィリアム・フォーサイス (Peter WELZ + William FORSYTHE)

ドイツ人マルチメディアアーティストと、アメリカ人振付家によるコラボレーション。1972年生まれのヴェルツは、ロンドン、ニューヨーク、ダブリンでアートと彫刻を学び、主に彫刻や映像インスタレーションを制作・発表している。フォーサイスは世界最高の振付家のひとり。バレエの実践を、古典的なレパートリー上演から21世紀にふさわしいダイナミックな芸術形式へと方向転換させたことで知られ、根本的な組織原理への深い関心によって、インスタレーション、映像、ウェブベースの知識創造など、幅広い創作活動を行っている。2004年に発表された本作は、ソロで踊るフォーサイスを5台のカメラ（内2台は本人が装着）で捉え、5チャンネルビデオで見せる画期的な映像インスタレーション。フォーサイスが空中に書き記す作品タイトルは、劇作家サミュエル・ベケットの散文作品『いざ最悪の方へ』に由来する。

《whenever on on nohow on | airdrawing》

Five channel video installation in collaboration with William Forsythe

2004, edition 5 + 2 AP

Installation view Museum für Moderne Kunst MMK, Frankfurt

photo: Klaus Peter Hoppe

courtesy of the artist, Peter Welz | Studio



やなぎみわ (YANAGI Miwa)

兵庫県生まれ。美術作家。2009年第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。2010年より活動領域を演劇にも広げ、2011年から「やなぎみわ演劇プロジェクト」を始動。演出・脚本・美術・衣裳デザインなどを手掛ける。2011年から12年にかけて、大正期の日本を舞台に、築地小劇場やマヴォなど新興芸術運動の揺籃を描いた「1924」三部作を制作・上演。続けて2012年に明治後期のパノラマ館などを舞台にした「パノラマ」シリーズを発表。メディア芸術と演劇の葛藤自体が作中に織り込まれる他に類を見ない形態となっている。今回上演するのは「声というアーカイブの亡霊」をテーマに、サミュエル・ベケットの戯曲『クラブの最後のテーブル』を折り込んだ新作。

「1924海戦」2011年11月
(神奈川芸術劇場)



カルロ・モンタナーロ (Carlo MONTANARO) 〈指揮〉

巨匠スービン・メータにその才能を見いだされたイタリア人指揮者。2001年にフィレンツェ歌劇場でオペラ・デビュー以来、ミラノ・スカラ座、ローマ歌劇場、バレルモのマッシモ劇場、ヴェローナ野外劇場、フェニーチェ歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラなど主要歌劇場で指揮し、高い評価を受けている。特にイタリアオペラでは定評があり、近年指揮者としての評価がますます高まっている。

日本では2009年に新国立劇場で「蝶々夫人」を指揮してデビュー。好評を博し、2012年11月に「セビリアの理髪師」でも再登場した。



田尾下 哲 (たおした てつ / TAOSHITA Tetsu) 〈演出〉

兵庫県生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。同大学院学際情報学府修士課程修了。オペラ演出をミハエル・ハンベに学び、新国立劇場でチーフ演出スタッフとして約70のプロダクションに参加し、日生劇場、二期会等でも演出を担当。09年、チューリヒ歌劇場『カヴァレリア/道化師』で、共同演出・振付を担当し、ヨーロッパデビュー。以後、コーミッシェ・オーバー・ベルリン『ラ・ボエーム』（アンドレアス・ホモキ演出）、NYリンカーンセンター『神経症ギリギリの女たち』（パートレット・シャー演出）などに参加。ミュージカル演出ではホリプロ『ボニー&クライド』、東宝『ソングス・フォー・ア・ニュー・ワールド』、フジTV『プロミセス、プロミセス』などがあり、劇作家としての活動も控えている。平成21年度五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。

photo: 平岩亨



安藤赴美子 (あんど う ふみこ / ANDO Fumiko) 〈蝶々さん〉

北海道出身。国立音楽大学声楽学科卒業、同大学院声楽専攻（オペラ）修了。新国立劇場オペラ研修所第3期生修了。文化庁派遣芸術家在外派遣員としてイタリアに留学。パオラ・モリナーリ、セルジョ・ベルトゥッキの各氏等に師事。2009年東京二期会『椿姫』（宮本亜門演出 新制作）ヴィオレッタ役でプリマドンナとしての将来性を十分に印象付けた。2012年びわ湖ホール・神奈川県民ホール共同制作オペラ『タンホイザー』エリザベト役で出演。2013年には同プロダクション『椿姫』にヴィオレッタ役で出演。二期会会員。



カルロ・バリッチェリ (Carlo BARRICELLI) 〈ピンカートン〉

イタリアのベネヴェント音楽院で学び、その後F.コレリ、P.ヴェントゥーリの下で研鑽。ピンカートン役とロドルフォ役でオペラデビュー。イタリア紙ラ・ナツィオーネから“強靱で活力に満ちた声に支えられたロマン的英雄の役に完全になりきるテノール”と評される。特にピンカートンでは、ヴェローナ野外劇場（ゼッフィレリ演出）、シュトゥットガルト州立歌劇場（レイゾッティ指揮）、プッチーニ音楽祭がある。プッチーニを得意としており、理想的な声を持つテノールである。



ガブリエーレ・ヴィヴィアーニ (Gabriele VIVIANI) 〈シャープレス〉

イタリアのルッカ生まれ。G.ボリドーリに師事しながら、ルッカのボッケリーニ音楽院で学ぶ。キャリアリオペラ劇場モーツァルト・コンクールで優勝し、ドン・ジョヴァンニとフィガロの役を与えられる。またカッシーナ・オペラ・コンクールでマスカーニ賞を受賞。グノー『ファウスト』ヴァランタン役でデビュー。トリエステで2004/05シーズンの最優秀歌手賞を受賞。ポローニャ、スカラ座、コヴェント・ガーデン、プッチーニ音楽祭など一流の歌劇場や音楽祭に度々出演している。日本でも、サントリーホール『ラ・ボエーム』、トリノ王立劇場の日本ツアーなどで登場している。シャープレスはトリエステ、ジェノヴァ、スカラ座、ヴェローナ等で歌っている。



田村由貴絵 (たむら ゆきえ / TAMURA Yukie) 〈スズキ〉

東京都出身。お茶の水女子大学及び東京芸術大学卒業、同大学院修了。2002年ニューウェーブ・オペラ『ポッペアの戴冠』オッターヴィアで二期会デビュー、その後も『ジュリアス・シーザー』（ジュリオ・チェザレ）題名役、東京二期会・ケルン市立歌劇場共同制作『ばらの騎士』『コジ・ファン・トゥッテ』で注目を浴びる。近年では08年東京二期会『エフゲニー・オネーギン』（コンヴィチュニー演出）オルガ、09年日生劇場『ヘンゼルとグレーテル』ヘンゼルで出演し、活き活きとした演唱で聴衆を魅了した。当劇場へは、06年と09年の「音楽への扉」、佐渡裕プロデュースオペラ『カルメン』（09年、兵庫・東京・愛知の3都市開催）メルセデスで出演。13年NHKニューイヤーオペラコンサートに出演。二期会会員。



姫田真武 (ひめだ まなぶ / HIMEDA Manabu)

アーティスト。1988年宮崎県生まれ。東京を拠点に活動。2013年、多摩美術大学大学院修士課程デザイン専攻アニメーション領域修了。『ようこそぼくです』(2011年、音楽協力：松永亜沙梨)は卒業制作として作られたアニメーションで、作者自身が幼児教育TV番組の“うたのおにいさん”を模したキャラクターとして登場。自作の歌に合わせて踊りを披露し、さらに歌の世界観をアニメーションによってより強力に増幅してゆくという構造を持っている。自作自演による個人映画、ないし私映画の系譜に位置づけられる作品とも見なさせるが、歌と踊りにアニメーションが加わってゆく相乗効果は、やや暴走気味なまでに過剰化する感もあり、これまでの個人制作アニメーションや実験映画とは違う、独自の到達を示している。本作は「第17回学生CGコンテスト」審査委員賞を受賞。以後、シリーズとして『ようこそぼくです2』(2012年)、『ようこそぼくです3』(2013年)が作られている。

『ようこそぼくです』2011



細江英公 (ほそえ えいこう / HOSOE Eikoh)

写真家。1933年山形県生まれ。東京を拠点に活動。1952年、東京写真短期大学(現東京工芸大学)入学。美術家の瑛九と交流を深める。大学卒業後はフリーの写真家として活動。1959年に、川田喜久治、佐藤明、丹野章、東松照明、奈良原一高らとともに写真家のセルフ・エージェンシー「VIVO」を設立。その頃に土方巽の舞踏『禁色』に出会い、土方や大野一雄と親交を深めた。1960年、個展「おとこと女」により日本写真批評家協会新人賞を受賞。同年に、唯一の映像作品『へそと原爆』を制作。その後も三島由紀夫を被写体とした『薔薇刑』や、土方巽を秋田の農村を舞台に撮影した『鎌鼬』(1969年芸術選奨文部大臣賞受賞)などを撮影。半世紀以上撮影してきた大野一雄は、2006年に「胡蝶の夢-細江英公人間写真集舞踏家・大野一雄」としてまとめられた。1998年紫綬褒章受章。2003年英国国王立写真協会創立150周年特別賞授賞。2010年文化功労者に選出。

『へそと原爆』1960



三宅 唱 (みやけ しょう / MIYAKE Sho)

映画監督。1984年北海道生まれ。東京を拠点に活動。2007年映画美術学校フィクションコース初等科修了。2009年一橋大学社会学部卒業。2009年短編『スパイの舌』が「第5回CO2」オープンコンペ部門最優秀賞受賞。2010年初長編作『やくたらず』を製作・監督(「第6回CO2」助成作品)。2012年度ロカルノ国際映画祭インターナショナル・コンペティション部門に正式出品された長編第二作目の『Playback』は、震災直後の茨城県水戸市がロケ地となっている。東京と水戸、中年男の現在と高校生との記憶、俳優村上淳とキャストのハジ、カメラは縦横無尽に異なる次元を行き来して、観客を“映画”という危うい記憶の旅に誘う。同じ設定も何度も演じる俳優としての“生”が、面影と化した旧友との記憶を呼び覚ます。細やかな編集によって演出された“繰り返し”が、奇想天外ともいえる設定にリアリティを与えている。「第27回高崎映画祭」新進監督グランプリ受賞。

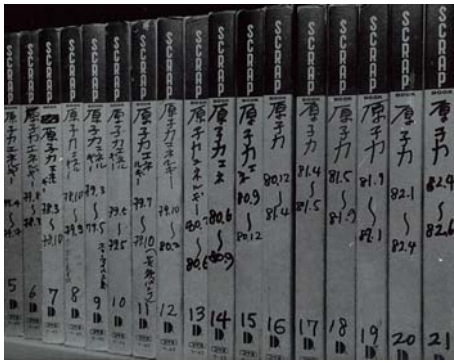
『Playback』2012



ぬQ (ぬきゅう / Nukyu)

アーティスト。東京生まれ。東京を拠点に活動。多摩美術大学大学院修士課程デザイン専攻グラフィックデザイン領域修了。「美しく、面白い」作品を目指し、アニメーションやイラストレーション、漫画を並行して制作している。初めてのアニメーション作品『ニュ〜東京音頭』(2012年)は、近くにあるように見えながら、遠くにあるなかなか行き着くことが出来ない、目映いばかりに輝く東京都心への屈折した心情を出発点に、シュルレアリスムを想起させるような、アニメーションならではの飛躍に富んだ、奔放な展開を提示し、一躍、注目を集めた。都市や建築空間への独自の視点を提示した作品として見ることも可能だろう。本作品は「第19回学生CGコンテスト」最優秀賞、「第16回文化庁メディア芸術祭」アニメーション部門審査委員会推薦作品を、短縮版が「マルチメディアコンテンツアワード2012」企業賞、「第2回予告デミー賞」銀賞を、それぞれ受賞している。

『ニュ〜東京音頭』2012



土本典昭(つちもとのりあき / TUCHIMOTO Noriaki)

記録映画作家。1928年岐阜県生まれ。小学生の頃、東京に移住し、以後、東京を活動拠点とする。1956年、岩波映画製作所に入社、ドキュメンタリー制作に携わる。1957年にフリーとなり、1963年『ある機関助手』で監督デビュー。もともと、国鉄のPR映画として企画された作品であるが、蒸気機関車を運転する人々の過酷な労働環境をも写し出す作品となり、反響を呼ぶ。1965年、水銀汚染により発生した水俣病のTV番組取材のため、熊本県水俣市を初めて訪れる。以後、長期に渡り水俣に滞在し、1971年『水俣一患者さんとその世界』を発表。その後も継続的に取材を行い、水俣関連の映画は計14本を数える、土本にとってのライフワークとなった。原子力問題にも早くから関心を持ち、当時、取材を拒否された原子力発電所を題材に映画を制作するため、新聞での報道を丹念に追跡することにより、問題点を浮き彫りにしたユニークな作品『原発切抜帖』(1982年)を手掛けた。2008年没。

『原発切抜帖』1982
© 青林舎



AICHI
TRIENNALE
2013

お問い合わせ

あいちトリエンナーレ実行委員会
〒461-8525 愛知県名古屋市東区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター 6階
TEL:052-971-6111 FAX:052-971-6115
E-mail:geijutsusai@pref.aichi.lg.jp